ISSN　2189－8979

三重大学国際交流センター

紀　　要

第 20 号（留学生センター紀要より通巻第 27 号）

目　　次

研究論文

感謝の気持ちを伝える e-mail の違い
　日本語母語話者と中国語母語話者を比較して …… 百　瀬　みのり（ 1－ 16）

日本の幼児は超自然的存在として
　すぐに神を思い浮かべるのか？ …… 富田　昌平・西谷優里彩（17－ 31）

「さすが」に対応する中国語表現について …… 周　　世　超（33－ 47）

2024 年度後期日本人チューター学生対象調査報告 …… 正　路　真　一（49－ 63）

三重大学国際交流センター紀要［投稿規定］ …… （65）

三重大学国際交流センター紀要［執筆要領］ …… （67）

執筆者一覧 …… （69）

編集後記

三重大学国際交流センター

2 0 2 5

研究論文

感謝の気持ちを伝える e-mail の違い
日本語母語話者と中国語母語話者を比較して

百　瀬　みのり

Differences in e-mails used to express gratitude
Comparing Japanese Native Speakers and Chinese Native speakers

Momose Minori

〈Abstract〉
This paper investigates and analyzes the differences in the way expressions of gratitude are expressed between Japanese Native Speakers (JNS) and Chinese Native Speakers (CNS) in e-mail discourse. As a result, it was found that the difference is that JNS e-mail discourse expresses gratitude by using multiple expressions of gratitude in long, polite sentences, while CNS e-mail discourse expresses gratitude by using short, concise expressions of gratitude in everyday language.

キーワード：感謝表現、「ありがとう（ございます / ございました）。」、JNS、CNS、e-mail

1．はじめに

本論は e-mail の談話を素材とし、感謝の日本語定型表現である「ありがとう（ございます / ございました）。」についての日本語母語話者と中国語母語話者の現れ方の差異について論じることを目的とするものである。

日本語の「ありがとう（ございます / ございました）。」はあらゆる日本語初級テキストに必須の学習項目として掲載されている。しかし、e-mail の談話を素材として、談話全体を射程に入れた上で、どのような談話の型の中でこの感謝表現が現れるか、また、日本語母語話者と中国語母語話者における現れ方の差異は何かについて、先行研究で論じたものはない。そこで本論は上記について明らかにすることを目的とし、調査と分析を行ってその結果を述べることで先行研究を補完する。

本論の構成は以下の通りである。第 1 章で本論の目的を述べ第 2 章で先行研究とその問題点を挙げる。第 3 章で日本語母語話者と中国語母語話者の e-mail の談話についての調査結果を述べ、第 4 章で日中の母語話者間での感謝表現の現れ方の差異を分析する。第 5 章

はまとめである。

2. 先行研究とその問題の所在

日本語感謝表現については、謝罪（詫び）表現との連続性が早くから指摘されてきた。熊取谷（1988）は感謝表現と謝罪表現を発話行為理論に基づく談話行動であると説明し、同（1994）で感謝表現が謝罪表現として使用されるのは「『聞き手にとっての有益状況』を『話し手にとっての深い状況』として捉える視点の移動による状況転換」（熊取谷，1994, p.68-69）によるものとした。三宅もまた（1994a）で日本語の謝罪表現が感謝表現として使用される事実を述べた上で、同（1994b）で感謝表現の日英比較を行い「同じ『借り』の状況でも、日本人は相手の負担に注目し、詫びの気持ちをもつことが多く、イギリス人は相手の行為に注目して、感謝の気持ちをもつことが多いという傾向がある」（三宅，1994b，p.12-13）と述べた。また孫（2007）は中国語母語話者である日本語学習者を対象に感謝表現として使用される日本語表現を調査し、中国語母語話者は日本語母語話者ほど感謝表現としての謝罪表現の使用が少ない（孫，2007，p.173）ことを指摘した。

そこで本論ではこの孫（2007）に注目し、日本語母語話者（以下 JNS とする）と中国語母語話者（以下 CNS とする）における感謝表現の現れ方の差異について調査することとし、談話全体から見た感謝表現の現れ方が日中の母語話者間でどのように異なるのかを明らかにする。具体的には、JNS と CNS ではどんな感謝表現の形式がどんな談話の型の中で現れるかを述べ、また、JNS と CNS での感謝表現が現れる談話の特徴を明確にすることで、先行研究を補う。

3．調査

3．1．調査結果

本論での調査対象は JNS60 名、CNS60 名が書いた感謝を表す e-mail である。「あなたはゼミで発表をします。発表で必要な本を先生 / 友人から借りました。そのお礼の気持ちを伝える e-mail を書いてください。」という課題を出し、合計 120 名分の e-mail に見られた感謝表現を調査した。

調査方法は村岡他（2005）、横川（2023）、百瀬（2025）を応用した。これは、これらの先行研究における調査方法が、感謝表現が現れる談話の型を、その構成要素と機能から確認できる方法であり、本論の目的に適ったものであることによる。なお、本論中では e-mail 自体は「談話」と考え、その表記単位を「文」及び「文章」と呼ぶこととする。

まず表 1 に、談話の構成要素とその機能、e-mail 中に見られた具体的な句例を示す。

3．1．1　具体的な句例

表１　談話の構成要素とその機能、e-mail 中に見られた具体的な句例 (1)

	構成要素名	機能	具体的な句例
(1)	送信先	宛名の提示。	○○先生/△△さん・△△ちゃん・△△くん・▽▽（ニックネーム）等
(2)	挨拶	メールの受信者に対する挨拶。	いつもお世話になっております。・いつも（ご指導を）ありがとうございます。/急にごめん。こんにちは。・こんばんは。・ヤッホー。・元気？・どうも。等
(3)	送信元	メールの送信者の名乗り。	●●と申します。・●●です。/●●です。・●●だよ。等
(4)	連絡理由	メール送信の理由の説明。	本を貸していただいたお礼を申し上げたく、ご連絡をさせていただきました。・本を貸していただいたお礼をお伝えしたくて、メールをさせていただきました。・この前のお礼をお伝えしたくて、ご連絡いたしました。/この前のお礼が言いたくてメールしました。・本を貸してもらったお礼を伝えたくて連絡しました。等
(5)	感謝	メール受信者への感謝の伝達。	ありがとうございました。・感謝しております。・感謝申し上げます。/ありがとうございました。・ありがとう・サンキュー・助かった。等
(6)	謝罪	メール受信者への謝罪の伝達。	申し訳ありませんでした。・失礼致しました・すみませんでした。/すいませんでした。・ごめんなさい。・ごめんね・ごめん・悪かった。等
(7)	結語	メールの文面を終了する旨の伝達。	よろしくお願い申し上げます。・よろしくお願い致します。/よろしくお願いします。・よろしく。・またね。・じゃあね・じゃあまた。等

（百瀬（2025）を一部加筆して抜粋。）

まず、(1) から (7) まで、構成要素名とその機能を示す。(1) は「送信先」で e-mail 受信者の宛名の提示を行う。以下同様に、(2) は「挨拶」で e-mail の受信者に対する e-mail 送信者からの挨拶、(3) は「送信元」で e-mail 送信者の名乗り (4) は「連絡理由」で e-mail 送信者から e-mail 受信者への e-mail 送信の説明、(5) は「感謝」で e-mail 送信者から e-mail 受信者への感謝の伝達、(6) は「謝罪」で e-mail 送信者から e-mail 受信者への謝罪の伝達、(7) は「結語」で e-mail 送信者から e-mail 受信者への e-mail の文面を終了する旨の伝達の機能を持つ。

具体的な句例は /（スラッシュ）前部が対先生、後部が対友人への句例である。(2) は「いつもお世話になっております。」、「いつも（ご指導を）ありがとうございます。」と、対先生の句には対友人の句には見られない敬語表現が見られる。

また、(3) から (7) までは、(3) の「●●です。」、(4) の「この前のお礼が言いたくてメールしました。」、「本を貸してもらったお礼を伝えたくて連絡しました。」、(5) の「ありがとうございました。」、(6) の「すいませんでした。」、(7) の「よろしくお願いします。」など、対友人であっても敬語（丁寧語）が使用されていることが分かる。

(2) のように e-mail の受信者が目上の人である先生の場合に敬語表現を使用するのは当然であるが、(3) から (7) のように e-mail の受信者が e-mail の送信者と同世代の友人で

ある場合にも敬語が使用されていることが注目される。

これは、本を貸してもらうという親切を受けた側である利益の受領者（e-mail の送信者）が親切を与えた側である利益の授与者（e-mail の受信者）に対し感謝の気持ちを表すために送付した e-mail 中の句であるので、普段なら敬語を使用しない間柄である友人に対しても敬語を使用したという e-mail の内容や e-mail の送付理由によるものであると考えられる [(2)]。

e-mail 中の敬語使用は、e-mail の送信者と受信者の間柄だけではなく、その内容や送付理由も関与することが分かる。

3. 1. 2　具体的な表現形式

次に、感謝の場面に現れた具体的な表現形式を確認する。

表 2　感謝の場面に現れた具体的な表現形式

	対先生	人数（%）	対友人	人数（%）
表現形式（JNS）	ありがとうございました。 ありがとうございます。 感謝申し上げます。 感謝しております。 感謝致します。 助かりました。 ありがたかったです。	22人（36.9%） 13 人（21.6%） 11人（18.7%） 8人（12.6%） 6人（10.3%） 3人（5.0%） 3人（5.0%）	ありがとう。 サンキュー。 助かった。 ラッキーでした。 ほっとした。 安心した（よ）。	50人（83.7%） 6人（10.3%） 6人（10.3 %） 3人（5.0%） 2人（3.3%） 2人（3.3 %）
	ご迷惑をおかけして申し訳ございませんでした。 先生のご本を貸していただき、申し訳ありませんでした。 突然すみませんでした。 大変失礼致しました。	16人（26.2%） 6人（10.3 %） 4人（6.5%） 3人（5.0%）	急にごめん（ね）。 迷惑かけてごめん（ね）。	6人（10.3 %） 4人（6.5%）
表現形式（CNS）	ありがとうございました。 ありがとうございます。 感謝しております。 感謝します。	37人（62.4%） 19人（32.3%） 3人（5.0%） 3人（5.0%）	ありがとう。 ありがとうございました。 感謝します。 Thank you.	31人（52.3%） 22人（36.3%） 4人（6.5 %） 2人（3.3 %）

（百瀬（2025）を一部加筆して抜粋。）

表 2 は感謝の場面に現れた具体的な表現形式を、JNS と CNS で、それぞれ対先生と対友人によって分類して示したものである。表中の%は小数点第 2 位以下を四捨五入して示す。同一人が異なる感謝表現を同一 e-mail 中で使用する場合もあるため、%の合計は 100.0%ではない。

まず、感謝の場面において最も見られた表現形式を母語話者別に確認する。感謝の場面で見られた表現形式は、JNS の場合、対先生が「ありがとうございました。」の 22 人（36.9%）、対友人が「ありがとう。」の 50 人（83.7%）、CNS の場合、対先生が「ありがと

うございました。」の 37 人（62.4%）、対友人が「ありがとう。」の 31 人（52.3%）である。母語の別、感謝を表す相手の別によらず、直截的に礼を述べる表現が感謝の場面では最も使用されていることが分かる。これらより、母語の別によらず、感謝を表すためには「ありがとう（ございます。/ ございました。）という定型表現を用いて感謝を示すことが一般的であると認識されていると考えられる。

次に JNS と CNS の表現形式を比較する。JNS は対先生で 11 種、対友人で 8 種の計 19 種の形式を示しており、一方 CNS は対先生で 4 種、対友人で 4 種の計 8 種の形式を示している。JNS の方が CNS よりも多種の表現形式を示していることが分かる。これは、JNS の方が CNS よりも感謝表現のバリエーションを多く知っていることに起因すると思われる。

さらに、JNS は感謝の場面において、対先生には「ご迷惑をおかけして申し訳ございませんでした。」（16 人（26.2%））、「先生のご本を貸していただき、申し訳ありませんでした。」（6 人（10.3%））、「突然すみませんでした。」（4 人（6.5%））、「大変失礼致しました。」（3 人（5.0%））、対友人には「急にごめん（ね）。」（6 人（10.0%））、「迷惑かけてごめん（ね）。」（4 人（7.4%））と、謝罪表現を使っている。この感謝表現としての謝罪表現の使用は CNS には見られない。特に対先生への「ご迷惑をおかけして申し訳ございませんでした。」（16 人（26.2%））、対友人への「急にごめん（ね）。」（6 人（10.3%））は、JNS における感謝の場面に現れた具体的な全表現形式中でも出現率が高い。対先生の「ご迷惑をおかけして申し訳ございませんでした。」（16 人（26.2%））は「ありがとうございました。」（22 人（36.9%））に次いで、対友人の「急にごめん（ね）。」（6 人（10.3%））は「ありがとう。」（50 人（83.7%））に次いで「サンキュー。（6 人（10.3%））と同じ出現率を示している。これらは JNS においては感謝の場面で謝罪表現を使うことがありしかもその割合は高いことを示しており、先行研究の熊取谷（1988）同（1944）や三宅（1994a）同（1994b）の結果を踏襲している。

以上より、感謝の場面に現れた具体的な表現形式については、JNS、CNS 共に「ありがとう（ございます。/ ございました。）」という感謝の定型表現を用いて感謝を示すことが一般的であること、JNS は CNS よりも感謝表現のバリエーションを多く知っていること、JNS は感謝の場面で謝罪表現を使用する場合があり、その割合は高いということが言える。

これらから、同じ感謝表現であってもその形式と示し方は、JNS と CNS では異なることが分かった。

3. 1. 3　具体的な談話の型

次に、以下の表 3 から表 6 に、e-mail 中の感謝の場面に現れた談話の型について示す。な

お、表 3-1、表 4-1、表 5-1、表 6-1 は百瀬（2025）からの抜粋である。表 2 と同様に、表中の％は小数点第 2 位以下を四捨五入しているため、％の合計は 100.0％ではない場合もある。

3．1．3．1　談話の型（JNS・対先生）

まず、表 3-1 に感謝の場面に現れた談話の型（JNS・対先生）を示す。

表 3 － 1　感謝の場面に現れた談話の型（JNS・対先生）[3]

	談話構成要素（JNS・対先生）	JNS話者人数（％）
1	【送信先】→【挨拶】→【送信元】→【感謝】→【連絡理由】→【感謝】→【結語】	23人（38.3％）
2	【送信先】→【挨拶】→【送信元】→【感謝】→【結語】→【感謝】	17人（28.3％）
3	【送信先】→【挨拶】→【送信元】→【謝罪】→【感謝】→【結語】	12人（20.0％）
4	【送信先】→【送信元】→【挨拶】→【連絡理由】→【感謝】→【結語】	5人（8.3％）
5	【送信先】→【挨拶】→【送信元】→【連絡理由】→ 【謝罪】→【結語】	3人（5.0％）
		60人（100.0％）

JNS 全 60 人中 23 人が型 1、同 17 人が型 2 の e-mail の談話であった。型 1 と型 2 を合わせると 40 人（66.7％）となり、全体の半数以上が 1 もしくは 2 の型の e-mail であった。1 の型は「【送信先】→【挨拶】→【送信元】→【感謝】→【連絡理由】→【感謝】→【結語】」の 7 つの構成要素から成っており、これは今回調査を行って得られた全談話の型の中で最多の構成要素数となる。2 の型は「【送信先】→【挨拶】→【送信元】→【感謝】→【結語】→【感謝】」の 6 つの構成要素から成っている。

表 3-1 からは、この型 1 と型 2 を含め（JNS・対先生）の場合、一つの談話が 6～7 つの構成要素から成っていることが分かる。それに比してその他の属性である（JNS・対友人）は 4～6、（CNS・対先生）は 4～5、（CNS・対友人）は 2～4 の構成要素から e-mail の談話が成っている。このことから、（JNS・対先生）の e-mail の談話は他の属性の e-mail に比し、構成要素の数が多いいわゆる「長い文章」であることが分かる。日本語母語話者である JNS による先生に対する e-mail であるので、長く書くことで感謝の気持ち、敬意を表しているのだと考えられよう。

また、型 1 と型 2 に関しては、【感謝】の構成要素が同一の e-mail 中に 2 回現れている。同一の e-mail 中で複数回感謝表現を使用することで、先生に対する心からの感謝の気持ちや丁寧さなどの配慮が表されていると言えよう。

以上、（JNS・対先生）の感謝の場面の談話の型の特徴は、6～7 の構成要素から成るいわゆる「長い文章」であり、また同一の e-mail 中で複数回感謝表現を使用しているということである。またこの特徴は、先生に対する感謝の気持ちや敬意、丁寧さなどの配慮が起因

していると考えられる。

次に、表 3-2 に談話の型 1 と型 2 の代表例を示し、その内容上の特徴を示す。

表 3 － 2　談話の型（JNS・対先生）型 1 と型 2 の代表例

（JNS・対先生）　型1の代表例	（JNS・対先生）　型 2 の代表例
○○先生【送信先】 いつもお世話になっております。【挨拶】 X大学Y学部1年生の●●です。【送信元】 先日は、「～～」の本をお貸しいただきありがとうございました。【感謝】 先生にご本を貸していただいたお礼を申し上げたくて、連絡させていただきました。【連絡理由】 先生にお借りしたほんのおかげで、無事に発表をすることができました。本当にありがとうございました。【感謝】 お借りした本は次回の授業でお返ししたいと思っております。どうぞよろしくお願い申し上げます。【結語】	○○先生へ【送信先】 いつもご指導をありがとうございます。【挨拶】 Y学部1年生の●●です。【送信元】 「～～」の本を貸していただき、どうもありがとうございます。【感謝】 おかげで発表ができました。今後とも、どうぞよろしくお願い致します。【結語】 本当にありがとうございました。【感謝】

先述したように、談話の型 1 と同 2 では一つの e-mail 中に【感謝】の構成要素が複数現れている。また、e-mail 中の文に「本をお貸しいただき」、「お礼を申し上げたくて、連絡させていただきました」、「お借りした本のおかげで」、「お返ししたい」、「どうぞよろしくお願い申し上げます」（以上型 1 の代表例より）や、「貸していただき」、「どうぞよろしくお願い致します」（以上型 2 の代表例より）といった敬語表現が見られる。また、e-mail 中の 1 つ 1 つの文が長く丁寧である。このような、感謝表現や敬語表現の重複使用や文自体の丁寧さによって、先生に対する感謝の気持ちが表されていることが、（JNS・対先生）の e-mail の内容上の特徴と考えられる。

3. 1. 3. 2　談話の型（JNS・対友人）

まず、表 4-1 に感謝の場面に現れた談話の型（JNS・対友人）を示す。

表 4 － 1　感謝の場面に現れた談話の型（JNS・対友人）

	談話構成要素（JNS・対友人）	JNS話者人数（%）
1	【送信先】→【感謝】→【結語】→【感謝】→【送信元】	37人（61.7%）
2	【送信先】→【送信元】→【感謝】→【結語】	16人（26.7%）
3	【送信先】→【送信元】→【挨拶】→【謝罪】→【感謝】→【結語】	5人（8.3%）
4	【送信先】→【送信元】→ 【感謝】→【謝罪】→【結語】	2人（3.3%）
		60人（100.0%）

JNS 全 60 人中 37 人が型 1、同 16 人が型 2 の e-mail の談話であった。型 1 と型 2 を合わせると 53 人（88.3%）となり、全体の 8 割以上が型 1 もしくは型 2 の e-mail である。型 1 は「【送信先】→【感謝】→【結語】→【感謝】→【送信元】」の 5 つの構成要素から成っており、この型 1 が（JNS・対友人）の e-mail に見られた型の半数以上（61.7%）を占めている。構成要素数は 4〜6 で、（JNS・対先生）の構成要素数 6〜7 と比較するとやや少なくなっている。

また、表 4-1 には、談話の構成要素中に【挨拶】が見られない。先出の表 3-1 では【挨拶】の構成要素が型 1 から型 5 まで見られ、特に型 1，型 2，型 3，型 5 は【送信先】の次に【挨拶】が、型 4 は【送信先】、【送信元】の次に【挨拶】が見られたが、表 4-1 では型 3 にのみ【送信先】、【送信元】に次いで【挨拶】が見られ [(4)]、他の型には【挨拶】はない。加えて、表 3-1 には見られた【連絡理由】[(5)] が表 4-1 には見られない。先生に対しては行っていた挨拶や e-mail での連絡理由の説明は、友人に対しては不要であると感じられ省略されたと考えられる。

以上、（JNS・対友人）の感謝の場面の談話の型の特徴は、（JNS・対先生）に対する感謝の気持ちを表す e-mail と比較するとその構成要素数が少なく、また、（JNS・対先生）への e-mail に見られた挨拶や e-mail 送付の連絡理由が見られないことが挙げられる。これらは、e-mail の送信先が友人であることから、e-mail 送付時の文章の形式に拘泥せず、不要な構成要素が省略された結果であると見ることができよう。

次に、表 4-2 に談話の型 1 と型 2 の代表例を示し、その内容上の特徴を示す。

表 4-2 より、（JNS・対友人）の e-mail の談話は（JNS・対先生）に比して、一文の長さが短い。また、e-mail の文章全体も短い。送信元である自分自身と同世代である友人に対する e-mail の談話は先生に対するものと比べて、重ねて敬語を使用する必要がなく、また、e-mail の文章の形式に則る必要がないと判断されるためであると考えられる。

このような、重複した敬語表現を使用せず短い文で構成された文章で、e-mail の文章形式に則らず平易に感謝の気持ちを表していることが、（JNS・対友人）の e-mail の内容上の特徴と考えられる。

表 4 － 2　談話の型（JNS・対友人）型 1 と型 2 の代表例

（JNS・対友人）　型1の代表例	（JNS・対友人）　型 2 の代表例
○○くん【送信先】 この前は、本貸してくれてありがとう！【感謝】 じゃあまたゼミで！【結語】 本当に助かった。今度何かあったら言ってね。【感謝】 ●●【送信元】	○○へ【送信先】 ●●です。【送信元】 本貸してくれてありがとう。今度お礼する。【感謝】 じゃあ大学で。【結語】

3. 1. 3. 3　談話の型（CNS・対先生）

まず、表 5-1 に感謝の場面に現れた談話の型（CNS・対先生）を示す。

表 5 － 1　感謝の場面に現れた談話の型（CNS・対先生）

	談話構成要素（CNS・対先生）	CNS話者人数（%）
1	【送信先】→【送信元】→【挨拶】→【感謝】→【結語】	33人（55.0%）
2	【送信先】→【送信元】→【感謝】→【結語】	16人（26.7%）
3	【送信先】→【挨拶】→【送信元】→【感謝】→【結語】	7人（11.7%）
4	【送信先】→【挨拶】→【感謝】→【結語】→【送信元】	4人（6.7%）
		60人（100.0%）

CNS 全 60 人中 33 人が型 1、同 16 人が型 2 の e-mail の談話であった。型 1 と型 2 を合わせると 49 人（81.7%）となり、全体の 8 割以上が型 1 もしくは型 2 の e-mail である。型 1 は「【送信先】→【送信元】→【挨拶】→【感謝】→【結語】」の 5 つの構成要素から成っており、この型 1 が（CNS・対先生）の e-mail に見られた型の半数以上（55.0%）を占めている。構成要素数は 4～5 で、（JNS・対先生）の構成要素数 6～7、（JNS・対友人）の構成要素 4～6 と比較するとやや少ない。

この（CNS・対先生）の談話の構成要素中には【挨拶】は見られるが、（JNS・対先生）の談話の構成要素にはあった【連絡理由】は見られない。先生に対する談話であるが、何のために e-mail を送付したかを説明する文章は、（JNS・対先生）には見られたが（CNS・対先生）には見られない。感謝の気持ちを伝える e-mail において、CNS の場合には、送信先が先生であっても e-mail 送付理由の説明は不可欠の要素ではないと考えられている可能性がある。

以上、（CNS・対先生）の感謝の場面の談話の型の特徴は、（JNS・対先生）、（JNS・対友人）に対する感謝の気持ちを表す e-mail と比較するとその構成要素数が少ないこと、また、（JNS・対先生）への e-mail には見られた e-mail 送付の連絡理由が見られないことが挙げられる。談話の構成要素数が JNS に比して少ないのは日本語自体や日本語 e-mail の書き方への習熟度の問題と考えられる。また、談話中に連絡理由が見られないのは、談話中に感謝の気持ちを表していることが既に e-mail 送付の連絡理由を述べていることになると考えられているためであると思われる [(6)]。

次に、表 5-2 に談話の型 1 と型 2 の代表例を示し、その内容上の特徴を示す。

表 5 － 2　談話の型（CNS・対先生）型 1 と型 2 の代表例

（CNS・対先生）　型1の代表例	（CNS・対先生）　型 2 の代表例
○○先生【送信先】 X学部Y学科の●●です。【送信元】 お世話になっております。【挨拶】 この前、本を貸してくださってありがとうございました。【感謝】 これからも頑張っていきたいと存じます。よろしくお願いいたします。【結語】	先生【送信先】 私は●●です。【送信元】 本をありがとうございました。【感謝】 今後もよろしくお願いします。【結語】

表 5-2 より、（CNS・対先生）の e-mail の談話は（JNS・対先生）、（JNS・対友人）の e-mail の談話に比して、文の長さが短い。また、e-mail の文章全体も短い。先生に対する e-mail であるが、日本語自体や e-mail の文章の書き方に対する習熟度の影響が考えられる。

「本を貸してくださって」、「頑張っていきたいと存じます」、「よろしくお願いいたします」（以上、型 1）、「ありがとうございました」、「よろしくお願いします」（以上、型 2）などの基本的な敬語表現の使用は見られるが、（JNS・対先生）と比較すると、1 つ 1 つの文の長さは短く、感謝表現の重複使用も見られない。（JNS・対先生）、（JNS・対友人）のように感謝の気持ちを多様な表現で重複して述べるのではなく、明確に一言述べることで伝えている。e-mail の文章全体が短い理由も、その点にあると考えられる。

このような、明確な一言で感謝の気持ちを述べ、基本的な敬語表現を使用して短い文で構成された文章で感謝の気持ちを表していることが、（CNS・対先生）の e-mail の内容上の特徴と考えられる。

3. 1. 3. 4　談話の型（CNS・対友人）

まず、表 6-1 に感謝の場面に現れた談話の型（CNS・対友人）を示す。

表 6 － 1　感謝の場面に現れた談話の型（CNS・対友人）

	談話構成要素（CNS・対友人）	CNS話者人数（%）
1	【送信先】→【送信元】→【感謝】→【結語】	29人（48.3%）
2	【送信先】→【挨拶】→【感謝】→【結語】	11人（18.3%）
3	【送信先】→【感謝】→【結語】→【送信元】	10人（16.7%）
4	【感謝】→【結語】→【送信元】	5人（8.3%）
5	【感謝】→【結語】	4人（6.7%）
6	【感謝】→【送信元】	1人（1.7%）
		60人（100.0%）

CNS 全 60 人中 29 人が型 1、同 11 人が型 2 の e-mail の談話であった。型 1 と型 2 を合わせると 40 人（66.7%）となり、全体の半数以上が型 1 もしくは型 2 の e-mail である。型 1 は「【送信先】→【送信元】→【感謝】→【結語】」の 4 つの構成要素から成っており、この型 1 が（CNS・対友人）の e-mail に見られた型の半数近く（48.3%）を占めている。構成要素数は 2〜4 で、（JNS・対先生）の構成要素数 6〜7、（JNS・対友人）の構成要素 4〜6、（CNS・対先生）の構成要素 4〜5 と比較すると少ない。

この（CNS・対友人）の談話の構成要素も（CNS・対先生）の構成要素と同じく、【連絡理由】は見られない。また、友人に対する e-mail の文章なので、「ありがとうございました」などの定型表現を含めなければ敬語表現も見られない。先述の（CNS・対先生）と同じく感謝表現の重複使用も見られない。

なお、この（CNS・対友人）の e-mail 談話では【感謝】の構成要素が談話の冒頭に来る文章が見られた。型 4，型 5，型 6 で 60 人中 10 人（16.7%）が、談話の最初に感謝の気持ちを述べている。かつ、この形式を取った談話は、構成要素数が 2〜3 と少ない。そのため e-mail の談話の文章全体は短いが、端的に、一目で分かるように感謝の気持ちが表されている。

以上、（CNS・対友人）の感謝の場面の談話の型の特徴は、（JNS・対先生）、（JNS・対友人）、（CNS・対先生）に対する感謝の気持ちを表す e-mail と比較するとその構成要素数が少ないこと、また、（CNS・対先生）の e-mail 談話と同じく、e-mail 送付の連絡理由が見られないこと、「ありがとうございました」などの定型表現以外の敬語表現や、感謝表現の重複使用が見られないことである。これらは概ね（CNS・対先生）の e-mail 談話と同様である。一方、（CNS・対先生）の e-mail 談話には見られなかった特徴としては、【感謝】

の構成要素が e-mail 談話の文章の冒頭に来る形式が 60 人中 10 人（16.7%）見られたことが挙げられる。この形式の談話は構成要素数が 2〜3 と少なく、e-mail の談話の文章自体は短いが、感謝の気持ちは端的に分かりやすく述べられている。

次に、表 6-2 に談話の型 1 と型 2 の代表例を示し、その内容上の特徴を示す。

表 6 － 2　談話の型（CNS・対友人）型 1 と型 2 の代表例

（CNS・対友人）　型1の代表例	（CNS・対友人）　型 2 の代表例
○○くん【送信先】 ●●です。【送信元】 本を貸してくれてありがとう。【感謝】 またゼミで。【結語】	○○さん【送信先】 こんにちは。【挨拶】 本を貸してくれて本当にありがとう。【感謝】 またね！【結語】

表 5-2 より、（CNS・対友人）の e-mail の談話は、（JNS・対先生）、（JNS・対友人）、（CNS・対先生）の e-mail の談話と比較すると文の長さが短く、e-mail の文章全体も短い。友人相手であるので敬語表現を使用する必要がなく、感謝表現の重複使用もない。友人あてであるので、e-mail の談話ではあるが日常生活で使用する話しことばをそのまま記述した文章を使い、（CNS・対先生）の e-mail の談話と同様に感謝の気持ちを一言で端的に伝えている。

このような、敬語表現や感謝表現の重複使用のない短い文から構成された短い文章で、日常的な話しことばを使い、感謝の気持ちを一言で端的に伝えていることが、（CNS・対友人）の e-mail の内容上の特徴と考えられる。

4. 分析－日中の母語話者間での感謝表現の現れ方の差異

3. より、談話全体から見た日中の母語話者間での感謝表現の差異について述べる。

まず、（JNS・対先生）の e-mail の談話は、6〜7 の構成要素から成るいわゆる「長い文章」で、同一の e-mail 中に複数回感謝表現を使用している。また、e-mail 中の文に複数の敬語表現が見られ、1 つ 1 つの文が長く丁寧である。このような、感謝表現や敬語表現の重複使用や文自体の丁寧さによって、先生に対する感謝の気持ちが表されていることが、（JNS・対先生）の e-mail の特徴と考えられる。

次に、（JNS・対友人）の e-mail の談話は、（JNS・対先生）の e-mail の談話と比較するとその構成要素数が少なく、また、（JNS・対先生）への e-mail の談話に見られた挨拶や e-mail 送付の連絡理由が見られない。これらは、e-mail の送信先が友人であることから、不

要な形式的構成要素が省略された結果であると考えられる。また、（JNS・対先生）に比して、一文の長さが短く e-mail の文章全体も短い。友人に対する e-mail なので重複した敬語使用もない。このような、重複した敬語表現を使用せず不要な形式を省略して短い文で平易に感謝の気持ちを表されていることが、（JNS・対友人）の e-mail の特徴と考えられる。

次に、（CNS・対先生）の e-mail の談話は、（JNS・対先生）、（JNS・対友人）の e-mail 談話と比較するとその構成要素数が少なく、また、（JNS・対先生）への e-mail には見られた e-mail 送付の連絡理由が見られない。先生に対する e-mail であるため基本的な敬語は使用されているが（JNS・対先生）と比較すると 1 つ 1 つの文の長さが短く、感謝表現の重複使用も見られない。（JNS・対先生）、（JNS・対友人）のように感謝の気持ちを多様な表現で重複して述べる形式ではなく、明確に一言述べる形式の e-mail の文章である。このような、明確な一言で感謝の気持ちを述べ、基本的な敬語表現のみを使用して短い文で構成された文章で感謝の気持ちを表していることが、（CNS・対先生）の e-mail の特徴と考えられる。

最後に、（CNS・対友人）の e-mail の談話は、（JNS・対先生）、（JNS・対友人）、（CNS・対先生）の e-mail の談話と比較するとその構成要素数が少なく、また、（CNS・対先生）の e-mail 談話と同じく e-mail 送付の連絡理由が見られない。「ありがとうございました」などの定型表現を除き、敬語表現や感謝表現の重複使用も見られない。このように概ね（CNS・対先生）の e-mail 談話と同様である一方、（CNS・対先生）の e-mail 談話とは異なり【感謝】の構成要素が e-mail 談話の文章の冒頭に来る形式が 60 人中 10 人（16.7%）見られる。

文の長さが短く、e-mail の文章全体も短い。友人相手であるので敬語表現を使用せず感謝表現の重複使用もない。e-mail の談話ではあるが日常生活で使用する話しことばをそのまま記述した文章を使い、感謝の気持ちを一言で端的に伝えている。このような、敬語表現や感謝表現の重複使用のない短い文から成る短い文章で、日常的な話しことばで感謝の気持ちを一言で端的に伝えていることが、（CNS・対友人）の e-mail の特徴と考えられる。

調査と分析によって分かったことを付け加えておく。まず、（JNS・対先生）、（JNS・対友人）、（CNS・対先生）、（CNS・対友人）の e-mail の談話全体を観察すると、どれも型 1 と型 2 で 50.0%以上を超えており、使用される談話の型の集中化が見られると言える。日本語指導の際には、使用頻度が高い型の学習が効果的であろう。

また、JNS と CNS を比較すると、JNS の e-mail の談話は、1 つ 1 つの文が敬語表現の使用によって長くなり、また、感謝表現の重複使用によって e-mail の文章が長くなる傾向がある。一方 CNS の e-mail の談話は、基本的な敬語表現の使用と端的な感謝表現から、1

つ 1 つの文が短く、それによって構成された e-mail の文章も短くなる傾向がある。総じて、JNS の e-mail の談話は、長く丁寧な文章中で複数の感謝表現を使用することで感謝の気持ちを表し、一方、CNS の e-mail の談話は、短く日常的なことばで端的に感謝表現をすることで感謝の気持ちを表すという差異がある。

さらに、敬語表現の使用にも差異がある。JNS も CNS も対先生の場合は敬語表現を使用するが、JNS は同一の e-mail の談話中で複数の敬語表現を使用するのに対し、CNS は基本的な敬語表現を使用するのに留まる。また JNS も CNS も対友人の場合は「ありがとうございました」などの定型的な表現以外には敬語表現を使用せず、日常的な話しことばで感謝の気持ちを表す傾向がある。

5. まとめ

以上、本論で述べたことをまとめる。本論では日本語母語話者（JNS）と中国語母語話者（CNS）における感謝表現の現れ方の差異について調査し、談話全体から見た感謝表現の現れ方が日中の母語話者間でどのように異なるのかを明らかにするために、JNS と CNS ではどんな感謝表現の形式がどんな談話の型の中で現れるか、また、JNS と CNS での感謝表現が現れる談話の特徴は何かを e-mail の談話を対象に調査、分析した。

（JNS/ 対先生）の e-mail の談話の特徴は、感謝表現や敬語表現の重複使用や文自体の丁寧さによって、先生に対する感謝の気持ちが表されていることである。

（JNS・対友人）の e-mail の談話の特徴は、重複した敬語表現を使用せず不要な形式を省略して短い文で平易に感謝の気持ちを表していることである。

（CNS・対先生）の e-mail の談話の特徴は、明確な一言で感謝の気持ちを述べ、基本的な敬語表現のみを使用して短い文で構成された文章で感謝の気持ちを表していることである。

（CNS・対友人）の e-mail の談話の特徴は、敬語表現や感謝表現の重複使用のない短い文から成る短い文章で、日常的な話しことばで感謝の気持ちを一言で端的に伝えていることである。

（JNS・対先生）、（JNS・対友人）、（CNS・対先生）、（CNS・対友人）の e-mail の談話全体を観察すると、使用される談話の型の集中化が見られる。

また、JNS の e-mail の談話は、1 つ 1 つの文が敬語表現の使用によって長く、感謝表現の重複使用によって e-mail の文章が長くなる傾向がある。一方 CNS の e-mail の談話は、基本的な敬語表現の使用と端的な感謝表現によって 1 つ 1 つの文が短く、e-mail の文章も短くなる傾向がある。総じて、JNS の e-mail の談話は、長く丁寧な文章中で複数の感謝表現を使用することで感謝の気持ちを表し、一方、CNS の e-mail の談話は、短く日常的なこ

とばで端的に感謝表現をすることで感謝の気持ちを表しているという差異がある。

さらに、感謝表現の使用にも差異があり、JNS も CNS も対先生の場合は敬語表現を使用するが、JNS は同一の e-mail の談話中で複数の敬語表現を使用するのに対し、CNS は基本的な敬語表現を使用するのに留まる。また JNS も CNS も対友人の場合は「ありがとうございました」などの定型的な表現以外には敬語表現を使用せず、日常的な話しことばで感謝の気持ちを表す傾向がある。

注

(1) 調査協力者は論者の授業に参加している JNS60 名（男子学生 41 名，女子学生 19 名の大学 1 年生）と，CNS60 名（N2 取得済みの男子学生 26 名，女子学生 34 名の来日 11 カ月目の大学生）である．調査は 2024 年 10 月 7 日から 10 月 21 日に課題 e-mail を提出してもらう形式で行った．

(2) 今回の e-mail の提出の後（10 月 21 日と 10 月 28 日）に行ったフォローアップインタビューによれば，対友人への e-mail 中での敬語使用の理由については JNS,CNS 共に「普段は敬語を使わずに話すが，今回は本を自分が貸してもらったから敬語を使った.」,「こちらが親切を受けた方だから.」との返答であった．

(3) 表 3-1，表 4-1，表 5-1，表 6-1 は（百瀬（2025））からの抜粋である．

(4) 表 4-1 の型 3 の代表例を示す．

（JNS・対友人）　型3の代表例
○○へ【送信先】 ●●です。【送信元】 急にごめん（ね）。じゃあ。【挨拶】 この前は「〜〜」の本、貸してもらってごめん。【謝罪】 あれで、本当に助かった。ありがとう。【感謝】 今度のゼミで返すね。【結語】

(5) 表 3-1 の型 1，型 4，型 5 に見られる．

(6) 注（2）と同様のフォローアップインタビューによれば,「なぜ連絡理由を e-mail に書かなかったのか」という問いに対し，60 人中 28 人（46.7%）の CNS が,「感謝の気持ちを e-mail に書いているので，それを見れば，連絡理由は分かるから」という主旨の返答をしている．その他 60 人中 32 人（53.3%）の CNS が「特に連絡理由を書かなかった理由はない」,「そもそも e-mail を書くときに，その連絡理由（送付理由）を普段から書かないから」という主旨の返答をしている．

[参考文献]

熊取谷哲夫（1988)「発話行為理論と談話行動から見た日本語の『詫び』と『感謝』」『広島大学教育学部紀要』第 2 部，第 37 号，pp.223 − 234.

熊取谷哲夫（1994）「発話行為としての感謝適切性条件，表現ストラテジー，談話機能」『日本語学』Vol.13，pp.63-72．明治書院
孫　守峰（2007）「感謝場面に使用される詫び表現の習得―在中と在日中国人学習者の詫び表現の使用率とパターン―」『日本語・日本文化研究』第 17 号，大阪外国語大学日本語講座
三宅和子（1994a）「『詫び』以外で使われる詫び表現」『日本語教育』82 号，日本語教育学会
三宅和子（1994b）「感謝の対照研究　日英対照研究―文化・社会を反映する言語行動―」『日本語学』Vol.13，pp.10-18．明治書院
村岡貴子・米田由喜代・因京子・仁科喜久子・深尾百合子・大谷晋也（2005）「農学系日本語論文の『緒言』の論理展開分析―形式段落と構成要素の観点から―」『専門日本語教育研究』7，pp.21-28．専門日本語教育学会
百瀬みのり（2025）「「ありがとう」と“Thank you”の差異」『台湾国際セミナー2025 予稿集』，ページ未定，台湾義守大学日本研究センター×アジア人材還流学会，国際シンポジウム 2025
横川未奈（2023）「日本語ビジネス E メールの構成・内容に見られる日本語母語話者と非日本語母語話者の配慮言語行動―日程再調整のビジネス E メールを事例に―」『日本語教育』第 185 号，pp.77-92．日本語教育学会

研究論文

日本の幼児は超自然的存在として すぐに神を思い浮かべるのか？

富田　昌平・西谷優里彩

Do young Japanese children immediately think of God as a supernatural being?

TOMITA Shohei and NISHITANI Yuria

〈Abstract〉

The purpose of this study was to clarify whether young Japanese children immediately think of God as a supernatural being and to what other beings besides God they attribute supernatural abilities. We also examined the developmental process of the concept of God's mind. We presented 58 4-, 5-, and 6-year-old children with a box that was dark so that they could not see what was inside (dark box task) and a box that was closed so that they could not know what was inside (closed box task). We then asked them who could see/know what was inside the box. We also presented them with God, Santa Claus, ghosts, fairies, aliens, and humans, and asked them who could see/know what was inside the box and why. The results of the study showed that only a few 6-year-olds spontaneously mentioned God (30% in the closed box task), and most children did not immediately think of God as a supernatural being. Instead, they thought of special animals, special humans, or ghosts. In addition, the number of children who answered "What humans cannot see or know, God can" increased from 4 to 6 years old.

Key Words: God, Supernatural being, Mind cognition, Conceptual development, Young Japanese children

問題と目的

近年、人はなぜ神を信じるのか、人々による神への信仰の起源と発達について扱う宗教性の発達心理学に対する関心が高まっている（e.g., Barrett, J. L., 2012/2023; Norenzayan, 2013/2022）。Richert, Boyatzis, & King（2017）によると、アメリカ心理学会（APA）が作成している心理学分野の文献抄録データベース「PsycINFO」に収録されている査読付き論文のうち、キーワードに「子ども」と「宗教」が含まれる論文は極めて少ないものの、2000 年から 2009 年までの 10 年間に限っては約 800 件もの論文があり、さらにその後の 10 年間の前半（2010 年から 2015 年まで）だけで約 700 件以上と増加しているという。こう

した状況を受けて、2017 年には British Journal of Developmental Psychology 誌で「宗教、文化、発達」をテーマにした特集号が組まれている。

神は人間とは異なり、あらゆるものを見ることができるし、あらゆることを知っていると一般的に考えられている。そして、そうした認識は 4 歳頃にはすでに形成されているとの報告がある。Barrett, Richert, & Driesenga（2001）は、3〜6 歳児を対象に、お菓子の写真が貼られた箱の中に実際には別のものが入っているという、心の理論研究でスマーティ課題として知られる課題を実施し、その体験をさせた後、もしも神が同じ状況に遭遇したならば、神も間違うかどうかを尋ねた。その結果、人間（母親や子ども）は誤った信念を持つこと、つまり人間の知る能力には限界があることを安定的に理解できるようになる以前の 4 歳頃から、子どもは神が誤った信念を持たないこと、つまり神の知る能力には限界がないということを理解できるようになることが示されている。

また、Barrett, Newman, & Richert（2003）は、3〜7 歳児を対象に、神と人間（母親）は何らかの視覚的表示の意味について知らされる以前から、その正しい意味を言い当てることができるかどうかを尋ねた。その結果、4 歳児でさえも、人間は正しい知識について外部から知らされる以前にそのことを知ることはできないが、神ならば可能であるというように、人間とは異なる神の心の性質について理解していることを明らかにしている。さらに、Richert & Barrett（2005）は、3〜7 歳児を対象に、通常の視覚では見ることのできない小さな絵や通常の聴覚では聞くことのできない小さな音声、通常の嗅覚では嗅ぎ取ることのできない密封された容器の中の匂いについて、神と人間（子ども自身と他の子ども）はそれを正しく知覚できるかどうかを尋ねた。その結果、3 歳児でさえも「神は知覚できる」とチャンスレベルを超えて判断したことを明らかにしている。加えて、Knight, Sousa, Barrett, & Atran（2004）は、Barrett ら（2001）と同様の課題をキリスト教文化圏以外の子ども（メキシコのマヤ族など）に対しても行い、その場合でも同様の結果が得られたことを報告している。

以上のように、神の心の概念は人間の心の概念よりも先に形成されるという説を支持する研究結果が示される一方で、人間の心の概念がまず形成され、その後に神の心の概念が形成されると主張する研究結果も報告されている。Makris & Pnevmatikos（2007）は、3〜7 歳児を対象に、暗くて中に何が入っているかを見ることができない箱と閉じられているため中に何が入っているかを知ることができない箱を提示し、それぞれに見ること・知ることができないという事実を確認させた後に、人間と神は箱の中身を見る・知ることができるかを尋ねた。その結果、3、4 歳児は人間と神の能力をほとんど区別していなかったが、5 歳児になると両者を明確に区別し、人間は見る・知ることができないが、神はそれがで

きると回答するようになることが示されている。また、Lane, Wellman, & Evans（2010）も 3，4，5 歳児を対象に、Makris & Pnevmatikos（2007）と同様の課題を行ったところ、3, 4 歳児は人間も神も箱の中身を知ることができないと答えたのに対して、5 歳児は人間にはできないが神ならばできると答えたことを明らかにしている。これらの結果から、Makris & Pnevmatikos（2007）や Lane ら（2010）は、子どもは最初、人間の心と神の心を同等のものとして捉え、次いで、人間の心の限界を捉えるようになり、その後、限界を持った人間の心とは区別する形で神の心の性質（全知など）を理解するようになるのではないかと主張している。

このように先行研究では、概念の形成において神の心が先か人間の心が先かが議論されているが、いずれにしても、神は人間とは異なる超自然的能力を持つという概念的理解は、少なくとも 5 歳頃には形成されることが明らかにされていると言える。しかし、これらはキリスト教圏にある欧米の子どもたちの結果に過ぎない。日本人の多くは特定の宗教を持たず、七五三などの成長を祝う行事は神道で行い、結婚式はキリスト教で行い、葬式は仏式で行っている。つまり、特定の神を明確に崇拝しているわけではない。こうした文化的背景の違いを考えると、神の心の概念の発達プロセスは、欧米の子どもとは異なる可能性が考えられる。

そこで中道（2011, 2013, 2016）は、日本の子どもにおける神の心の概念の発達プロセスについて検討を行った。まず、中道（2011）は、3〜6 歳児を対象に、神と人間（子ども自身と子どもの母親）は例えば妖精のような空想上の存在を直接的にその目で見ることができるかどうかを尋ねた。その結果、3-4 歳児でさえも、子ども自身と母親は空想上の存在を見ることができないが、神であれば見ることができるというように、神と人間とを区別した判断を行うことを明らかにしている。次に、中道（2013）は Barrett ら（2001）と同様の誤信念状況を提示し、神や人間は間違えるかどうかを尋ねた。その結果、「人間は間違えるが、神は間違えない」との判断は 5-6 歳児でようやく可能になり、3-4 歳児はあいまいな判断で、4-5 歳児は人間の知る能力の限界については正しく答えることができたものの、神の全知については十分な認識を持たないことを明らかにしている。さらに、中道（2016）は Richert & Barrett（2005）と同様の課題状況を提示し、通常の視覚、聴覚、嗅覚では捉えることのできない対象の性質について、神と人間は捉えることができるかどうかを尋ねた。その結果、「人間は知覚できないが、神は知覚できる」というように、神と人間とを区別し、神の知覚能力のみを特別視することができたのは 5-6 歳児のみであったことを明らかにしている。

中道（2011, 2013, 2016）による一連の研究結果は、日本の子どもも欧米の子どもと概ね

同様の発達プロセスを辿ることを示唆するものである。また、中道の研究結果は、子どもはまず人間の心の限界について理解した後に、それをふまえて神の心の性質（全知など）について理解するようになるという Makris & Pnevmatikos（2007）や Lane ら（2010）の結果を支持していると言える。しかし先に述べたように、日本人の多くは特定の神を必ずしも崇拝していないという事実を考えると、「超自然的能力を持つ存在＝神」という考えを前提とした研究デザインは、日本の子どもを対象とする場合には違和感がある。そもそも日本の子どもは、超自然的能力を持つ存在としてすぐさま神を思い浮かべるのであろうか。日本の子どもが置かれている文化的環境を考えると、超自然的存在として神を想定する以前に、何らかの他の神とは異なる存在を想定している可能性も考えられる。つまり、人間と他の様々な存在（神も含む）の心をまずは同列に捉えた後、次いで、人間の心の限界に気づき始め、そのうえで限界を超越した存在として何らかの神とは異なる存在を捉えるようになり、そして最終的に、そうした超越的な心のより純度の高い存在として神を思い描くようになるのかもしれない。このような日本の子ども独自の発達プロセスを辿ることも一方では考えられる。

そこで本研究では、日本の子どもは超自然的能力を持つ存在としてすぐに神を思い浮かべるのかどうか、また神よりも先にそうした能力を帰属させる存在がいるとしたらそれは何かを明らかにすることを目的とする。具体的には、3 歳から 6 歳の子どもを対象に Makris & Pnevmatikos（2007）と同様に、暗くて中に何が入っているかを見ることができない箱と閉じられているため中に何が入っているかを知ることができない箱を提示し、それぞれに見る・知ることができないという事実を確認させた後に、見る・知ることができる存在はいるかどうか、また、いるとしたらそれはどのような存在かを尋ねることとする。これまでの研究では、考えられる存在として神と人間を先に提示していたが、本研究では、子どもが自発的に神に言及するかどうか、また神以外にどのような存在に言及するかを探る。そのうえで、考えられる存在として神と人間以外に、サンタクロース、おばけ、妖精、宇宙人を提示し、それらに超自然的能力をどのくらい帰属させるかを検討することで、神の心の概念の発達プロセスについても改めて明らかにする。

方　法

対象児

三重県四日市市内の私立 A 幼稚園に通う年少児 18 名（男児 9 名、女児 9 名、平均年齢 4 歳 1 か月、年齢範囲 3 歳 6 か月～4 歳 6 か月）、年中児 20 名（男児 14 名、女児 6 名、平均年齢 5 歳 1 か月、年齢範囲 4 歳 6 か月～5 歳 5 か月）、年長児 20 名（男児 12 名、女児 8

名、平均年齢 6 歳か月 1 か月、年齢範囲 5 歳 8 か月〜6 歳 5 か月）が対象であった。

材　料

2 つの課題（暗い箱課題と閉じた箱課題）では、縦 150mm ×横 150mm ×高さ 150mm の立方体の桐箱を 2 個使用した。暗い箱課題では、箱の上部と側面（一面のみ）に 10mm 程の穴を 1 つずつあけ、内部にパンダのフィギュアを入れて、動かないように固定されていた。側面の穴は通常ふたで閉じられており、中身を確認するときにのみふたを開けて、穴にペンライトをあてて照らすことで、箱の中身（パンダ）が分かるような仕組みにした。また、閉じた箱課題では、箱に穴はなく全体的にテープでふたが開かないようにされていた。内部に木製のブロックが 3 つ入れられており、箱を振ると音が鳴って、中に何かが入っていることが確認できるような仕組みにした。

また、超自然的能力を持つ存在の認識について探るために、神様、おばけ、妖精、宇宙人、サンタクロース、人間の子ども（あおいちゃん）が描かれた 6 枚の絵カードを用意した。絵カードは縦 15cm ×横 13cm の大きさで、有彩色で描かれており、ラミネート加工されていた。

また、実験室内での子どもとの会話ややりとりの様子を記録するために、ビデオカメラを使用した。

手続き

実験は預かり保育の時間帯に、職員室内にある談話室で個別に行われた。実験を行うにあたって事前に園長、担任教諭に研究内容を説明し、了解を得たうえで実施した。また、実験を行う第 2 著者は園に数日通い、事前に対象児たちと遊ぶなどして十分にラポールを形成した。実験者はこの時点で幼稚園教諭一種免許状と保育士資格の取得に必要な実習をすべて終了しており、子どもとかかわることには慣れていた。対象児は部屋に入るとテーブルを挟んで実験者と向かい合わせに座り、その日の遊びなどについて少し話すなどリラックスさせたうえで実験に参加した。実験は「暗い箱課題」「閉じた箱課題」という固定された順序で行った。

<u>暗い箱課題</u>：　実験者は対象児に「ちょっと見てもらいたいものがあるんだ」と言い、目の前に箱（暗い箱）を提示した。次に、「箱の中に何か入っているかもしれないから、この穴から中を覗いて見てくれる？」と対象児に言い、上部の穴から中を覗くように伝えた。対象児が覗いた後、「何か見えた？」と尋ね、箱の中が暗くて中がよく見えないことを確認した。それから、ペンライトを対象児の前に提示し、それまでふさがれていた側部の穴にそ

れをあて、「箱の中身を明るくしてもう一度見てみよう」と言い、ライトのスイッチを入れて箱の中が見えるようにした。対象児が箱の中を覗くと再び「中に何が入っている？」と対象児に尋ね、箱の中にパンダのフィギュアが入っていることを確認した。その後も数回、ライトのスイッチを入れたり消したりをくり返し、「明かりをつけると中身が見えるけど、消すと見えない」ことを確認した。

以上のように、普通の人間であれば特別な道具（ペンライト）を使わない限り、中身を確認できないことを確認した後、次のような一連の質問を行った。

まず、「明かり（ペンライト）がなくても箱の中身が分かる人はいるかな？」（質問 1）と尋ね、「いる」と答えた場合には「誰だったら暗くても中身を見ることができるかな？」（質問 2）と尋ね、その理由についても尋ねた（「どうしてそう思うの？」）。

次に、「お姉さん、『こんな人だったらもしかしたら見えるかもしれない』と思って絵を描いてきたんだけど…」と言いながら、6 枚の絵カード（神様、サンタクロース、おばけ、妖精、宇宙人、人間の子ども）を対象児の前に提示し、それぞれに何が描かれているかを説明した後、「このカードの中で、誰だったら明かりがなくても箱の中身が分かると思うかな？」（質問 3）と尋ね、その理由についても尋ねた（「どうしてそう思うの？」）。

閉じた箱課題：　続けて、実験者は対象児に「もう一つ似ている箱を見つけたんだ」と言い、目の前に別の箱（閉じた箱）を提示した。そして、「さっきの箱（暗い箱）と違うところがあるんだけど、どこが違うか分かる？」と尋ね、穴がないこととテープが貼られていてふたが開かないことを確認した。次に、「でも箱の中に何かが入っているみたいなんだ」と言い、箱を振って音を聞かせた。対象児にも箱を振ってみるように伝え、「中に何かが入っているが、閉じられているので中身がよくわからない」ことを確認した。

以上のように、普通の人間であればふたを開けて中身を見ない限り、中身を確認できないことを確認した後、次のような一連の質問を行った。

まず、「穴もないし、ふたも開かないけれど箱の中身が分かる人はいるかな？」（質問 1）と尋ね、「いる」と答えた場合には「誰だったらふたを開けなくても中身を知ることができるかな？」と尋ね、その理由についても尋ねた（「どうしてそう思うの？」）。

次に、「お姉さん、『こんな人だったらもしかしたら分かるかもしれない』と思って絵を描いてきたんだけど…」と言いながら、6 枚の絵カード（神様、サンタクロース、おばけ、妖精、宇宙人、人間の子ども）を対象児の前に提示し、それぞれに何が描かれているかを説明した後、「このカードの中で、誰だったらふたを開けなくても箱の中身が分かると思うかな？」（質問 3）と尋ね、その理由についても尋ねた（「どうしてそう思うの？」）。最後に、ふたを開け、箱の中に木製のブロックが入っていることを確認し、実験内容は友達に

内緒にするようにと伝え、実験参加へのお礼を言って終了した。

結　果

神への自発的な言及

幼児は超自然的存在について尋ねられれた時、すぐに神を思い浮かべるのであろうか。普通の人間では見ることも知ることもできないような箱の中身を見る・知ることができるような、超自然的能力を持った存在はいるかどうかを尋ねたところ（質問 1)、Table 1 に示すように、年少児と年中児では「わからない」と回答する者が多く見られたのに対し、年長児では「いる」と明確に回答する者が増加した。「いる」と回答する者が有意に増加しているのかどうかを確かめるために、「いない」回答者と「わからない」回答者をまとめて 3（年齢）× 2（回答：いる、いない／わからない）の χ^2 検定を行ったところ、暗い箱課題では有意傾向（$\chi^2(2) = 5.14$, $.05<p<.10$)、閉じた箱課題では有意差が確認された（$\chi^2(2) = 8.74$, $p<.05$)。残差分析の結果、年長児では年少児よりも「いる」と回答する者が有意に多いことが示された（$p<.05$)。

Table 1　人間では不可能なことを可能にできる存在の有無に関する各回答の人数

	暗い箱			閉じた箱		
	年少児	年中児	年長児	年少児	年中児	年長児
N	18	20	20	18	20	20
いる	8	12	16	6	7	15
いない	1	0	0	1	2	2
わからない	9	8	4	11	11	3

Table 2　超自然的能力を持つ存在として思い浮かべる存在の種類に関する各回答の人数

	暗い箱			閉じた箱		
	年少児	年中児	年長児	年少児	年中児	年長児
N	18	20	20	18	20	20
神	0	0	0	0	1	6
サンタクロース	1	0	0	1	0	0
おばけ	1	1	1	1	3	3
空想上・歴史上の存在	0	0	1	1	1	3
人間	2	6	5	4	2	5
動物	4	5	9	1	1	2
その他	0	0	0	0	0	2

超自然的能力を持つ存在として誰を思い浮かべるかを尋ねたところ（質問 2)、回答は Table 2 に示すように、①神、②サンタクロース、③おばけ、④空想上・歴史上の存在（魔法使い、魔女、忍者、鬼、透明人間、ドラえもんなど)、⑤人間（園長先生、担任の先生、実験者、頭のいい人、強い人、音について調べている人、箱をつくった人など)、⑥動物（ネコ、フクロウ、コウモリ、ホタル、ゴリラ、サル、キツツキなど)、⑦その他に分けられた。特に、人間では主に、子どもにとって権威のある人物や箱を開けたり壊したりできる人物、音を手掛かりに中身を正しく推測できる人物などが挙げられ、動物では主に、暗い場所でもよく見える目を持つ動物や箱に穴を開けたり壊したりできる動物などが挙げられた。複数回答が可能であったため、多い者で 3 つの回答が得られた。Table 2 は、一度でも上記のカテゴリーに含まれる回答をした者の人数を示している。暗い箱課題では自発的に神に言及する者は見られず、閉じた箱課題でもようやく年長児で 6 名が言及したに過ぎなかった。思い浮かべた存在として最も多かったのは、暗い箱課題では動物（18 名）であり、次いで人間（13 名）であった。また、閉じた箱課題では人間（11 名）が最も多く、次いで神とおばけ（各 7 名）であった。なお、本研究では課題の提示順序が固定されており、閉じた箱課題の前に暗い箱課題において神とおばけが選択肢として提示されていたことの影響は否定できない。逆に言えば、直前に神という選択肢を提示されていたにもかかわらず、年少児と年中児は 1 名を除いて誰も自発的に神について言及しなかったことになる。

超自然的存在としての神の認識

次に、超自然的能力を持つと考えられる者として実験者が 6 枚の絵カード（神様、サンタクロース、おばけ、妖精、宇宙人、人間）を提示し、このうちの誰がそのような力を持ちうると考えられるかについて判断を求めた（質問 3)。自発的には思い浮かべなかったとしても、神を超自然的存在として認識しているかどうかを探るためのものであり、人間やその他の超自然的存在とどのように区別できているかを探るためのものである。Table 3 は各存在に対する判断の結果を年齢別に示したものである。

まず、年齢による回答の変化を探るために、各課題の存在ごとに 3（年齢）× 2（回答）の χ^2 検定を行ったところ、閉じた箱課題の人間の子ども（$\chi^2(2) = 15.81, p<.01$）と宇宙人（$\chi^2(2) = 10.33, p<.01$）において有意差が確認された。残差分析の結果、人間に関しては、年長児では年少児よりも「できない」が有意に多いことが示され（$p<.01$)、宇宙人に関しては、年少児では年長児よりも「できる」が有意に多いことが示された（$p<.01$)。

次に、回答の一方に有意な偏りが見られたかどうかを探るために、チャンスレベル（50%）

の検定を行った。年少児の場合 13 名以上、年中児と年長児の場合 15 名以上で 5%水準の有意差となる。その結果、暗い箱課題では、おばけと宇宙人ではすべての年齢で「できる」（すなわち、超自然的能力を持ちうる）が有意に多く見られ、サンタクロースでは年少児と年長児、神では年長児のみで「できる」が有意に多く見られた。逆に、人間では年中児と年長児で「できない」（すなわち、超自然的能力を持ちえない）が有意に多く見られた。閉じた箱では、サンタクロース、おばけ、宇宙人で「できる」が有意に多かったのは年少児のみであり、一方で神では年長児のみで「できる」が有意に多く見られた。人間については暗い箱課題と同様に、年中児と年長児で「できない」が有意に多く見られた。

Table 3　存在 X に対する超自然的能力の帰属の有無に関する各回答の人数

		暗い箱			閉じた箱		
		年少児	年中児	年長児	年少児	年中児	年長児
N		18	20	20	18	20	20
神	できる	12	12	16	11	11	16
	できない	6	8	4	7	9	4
サンタ	できる	13	11	16	13	5	11
	できない	5	9	4	5	15	9
おばけ	できる	16	17	18	15	11	13
	できない	2	3	2	3	9	7
妖精	できる	10	11	14	11	8	11
	できない	8	9	6	7	12	9
宇宙人	できる	15	15	15	14	6	7
	できない	3	5	5	4	14	13
人間	できる	6	2	3	11	4	1
	できない	12	18	17	7	16	19

しかし、各存在に帰属させた超自然的能力が本当の意味での超自然的能力なのかどうかを明らかにするためには、知覚的アクセスがなくても見る・知ることができるというのは人間には不可能な超自然的能力であると幼児が適切に捉えているのかどうかを確認する必要がある。これらは実験の最初の時点で体験的に確認されていたが、提示された 6 枚の絵カードのうち、人間の子どもに対しても超自然的能力を帰属させるという誤りを犯した幼児は、暗い箱課題で 19%、閉じた箱課題で 28%ほど確認された。そこで次の分析では、6 枚の絵カードの中で人間に関しては「できない」と判断したうえで、それ以外の特定の存在に対して「できる」と判断した者が各年齢でどれほどいたかを算出した。

Figure 1 と 2 は、各課題における「人間にはできないが、その存在はできる」と判断した者の割合を示したものである。年齢による回答の変化を探るために、各課題の存在ごとに 3（年齢）× 2（正しい判断、それ以外）の χ^2 検定を行ったところ、暗い箱課題ではい

ずれの存在でも有意差は見られなかったが、閉じた箱課題では、神（$\chi^2(2) = 12.99, p<.01$）とサンタクロース（$\chi^2(2) = 11.69, p<.01$）と妖精（$\chi^2(2) = 8.39, p<.05$）において有意差が確認された。残差分析の結果、神に関しては年長児では年少児よりも、サンタクロースに関しては年長児では年中児よりも、妖精に関しては年長児では年少児よりも正しい判断が有意に多いことが示された（いずれも p<.01）。

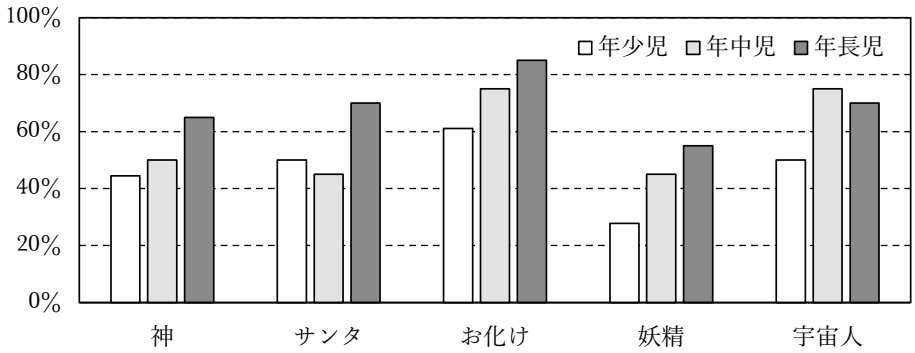


Figure 1 「人間にはできないが存在 X にはできる」と
回答した者の割合（暗い箱課題）

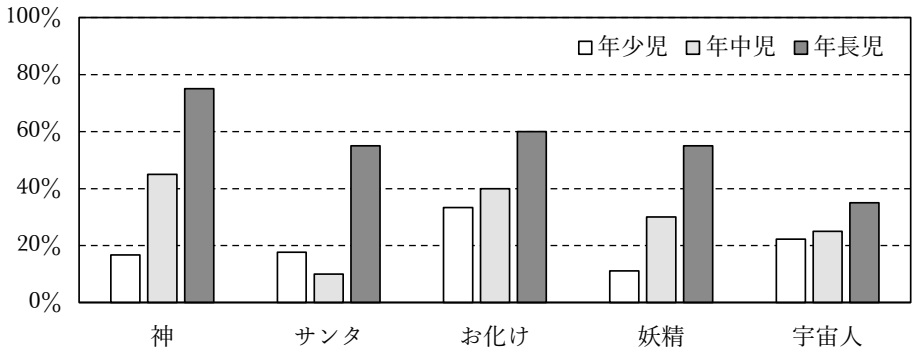


Figure 2 「人間にはできないが存在 X にはできる」と
回答した者の割合（閉じた箱課題）

超自然的能力を持ちうる／持ちえない根拠

最後に、それぞれの存在が超自然的能力を持ちうると考える、または持ちえないと考える根拠についてどのような考えを持っているかを探るために、質問 3 の判断に対する理由づけを分析した。理由づけの機会は年少児が 108 回、年中児と年長児が 120 回あった。各年齢で何らかの理由づけ（「わからない」「どうしても」あるいは無回答以外）を行うことができた回数を算出すると、暗い箱課題では、年少児 58 回（54%）、年中児 98 回（82%）、

年長児 109 回（91%）、閉じた箱課題では、年少児 51 回（47%）、年中児 79 回（66%）、年長児 112 回（93%）であった。年少児では約半数が判断の根拠を持たないか、あるいは持っていたとしてもうまく言語化できないかのいずれかであったが、年長児になるとほぼ全員が自らの判断の根拠を言語化できるようになっていることが分かる。また、6 つの判断すべてで理由づけを行えなかった者は、年中児では暗い箱課題と閉じた箱課題で 1 名と 3 名、年長児ではともに 0 名と少なかったのに対して、年少児では 6 名と 5 名というように約 3 分の 1 も見られた。

幼児によって生成された判断の理由づけは多岐にわたったが、中でも多く見られたのは個々の身体的特徴や行動特性への言及であった。例えば、暗い箱課題において暗くても箱の中身を見ることができる理由として、神に関しては頭上の光輪や後光（「頭の上に光があるから」「キラキラ光っているから」など）、サンタクロースに関しては暗闇への慣れ（「夜に動き回っているから。暗いところでも見える」「真っ暗でもプレゼントを届けてくれるから」など）、おばけに関しても同様に暗闇への慣れ（「暗いところにいるから。暗くても見える」など）や姿を消す能力（「透明になって穴から入れるから」「通り抜けられるから」など）、妖精に関しては羽が放つ光（「羽が光るから」「ピカピカ光っているから」など）や体の小ささ（「小さいから中に入れる」など）、宇宙人に関しては乗ってきたであろう UFO や体が放つ光（「UFO は光っている。だから見える」「体が銀色でピカーンと光っているから」など）と目の大きさ（「目が大きいから見えそう」など）が挙げられた。閉じた箱課題においても同様に個々の身体的特徴や行動特性への言及はしばしば見られたが、これに加えて、特に神と妖精に関しては魔法の力（「魔法を使ってふたを開けられるから」「願いを叶えられるから」など）への言及が見られた。

ここで特に重要なのは、身体的特徴や行動特性、魔法の力への言及ではなく、限界を超越した心の性質への気づき、すなわち、「何でも見える」「何でも知っている」という全知への言及が、人間以外の個々の存在に対して各年齢でどれほど見られたかという点と、「人間だから（できない）」という人間の能力の限界への言及が人間に対して各年齢でどれほど見られたかという点である。Table 4 は神とサンタクロースの全知への言及、人間の能力の限界への言及が見られた人数を課題別、年齢別に示したものである。なお、おばけ、妖精、宇宙人に関してはいずれの課題でも全知への言及がいっさい見られなかったため、Table から除外した。Table 4 から分かるように、全知への言及は神に多く見られ、サンタクロースではわずかであった。それでも、わずかながらにも見られたことから、幼児がサンタクロースを他のどんな存在よりも神と近しい存在と見なしていることがうかがえる。また、神の全知への言及は年少児と年中児ではほとんど、あるいはまったく見られず、年長児にお

いて多く見られた。さらに、人間の能力の限界への言及は年中児と年長児で多く見られた。

Table 4　神とサンタの全知への言及と人間の能力の限界への言及の人数

	暗い箱			閉じた箱		
	年少児	年中児	年長児	年少児	年中児	年長児
N	18	20	20	18	20	20
神の全知への言及	0	1	6	0	0	6
サンタの全知への言及	0	1	0	0	0	2
人間の能力の限界への言及	1	4	5	0	1	8

考　察

本研究の目的は、日本の幼児は超自然的能力を持つ存在としてすぐに神を思い浮かべるのかどうかを明らかにすること、幼児にとって神よりも先に超自然的能力を帰属させる存在がいるとしたらそれは何かを明らかにすること、そして、神の心の概念の発達プロセスについて改めて明らかにすることの 3 点であった。以下では、本研究の結果をもとに順に考察していく。

まず、日本の幼児は超自然的能力を持つ存在としてすぐに神を思い浮かべるのかどうかに関しては、思い浮かべた存在について自発的な回答を求めたところ、神の存在を挙げた者は年長児でようやく 30%ほどが見られたに過ぎず、参加した幼児の大部分が自発的に神について言及することはなかった。本研究では 2 つの課題の順序を固定していたが、最初の課題で選択肢として神が取り上げられた後でも、年少児と年中児は 2 つ目の課題で神について言及することはほとんどなかった。このことは、日本の幼児にとって超自然的能力を持つ存在とはすぐさま神を意味するわけではないことを示唆していると言える。

では、彼らは超自然的存在として何を思い浮かべたのであろうか。最も多く見られたのは人間であり、動物であった。人間に関しては、子どもにとって自分よりも優れて見える、身近な権威のある大人や、漠然と頭がいい人や力の強い人、あるいは特定の分野で専門的な知識や技術を有する人などが挙げられた。動物に関しては、暗闇でもよく見える目を持っていたり、箱に穴を開けたり壊したりできる動物などが挙げられた。こうした結果は、本研究で使用した課題が必ずしも超自然的能力に頼らずとも箱の中身を把握できる内容であった可能性を示唆しており、この点は今後修正すべき課題と言えよう。従って、日本の幼児は超自然的能力を持つ存在としてすぐに神を思い浮かべるわけではないという本研究の結果は、その点を踏まえて慎重に扱う必要があろう。

次に、幼児にとって神よりも先に超自然的能力を帰属させる存在がいるとしたらそれは何かに関しては、先ほど述べた人間や動物以外で自発的に挙げられた存在は、おばけであっ

た。おばけは暗闇でも目が利き、姿を消したり、壁を通り抜けたり、体を小さくして穴から入ったりすることができると彼らに考えられていた。おばけを題材とした絵本は『ねないこだれだ』（せなけいこ作・絵、福音館書店 , 1969）をはじめ数多くつくられており、幼児にとって身近に触れる機会も多く、また「早く寝ないとおばけが来るよ」という決まり文句に代表されるように、親も子どもとの日常生活において頻繁におばけに言及する。こうした背景には、おばけ（妖怪や幽霊なども含む）を生活の中で身近に感じてきた日本独自の文化が関係していると考えられる（小松 , 2012）。従って、幼児にとっておばけは神以上にポピュラーな超自然的存在として認知されているとしても何ら不思議はないと言える。実際、絵カードを提示しての質問においても、特に年少児と年中児において、おばけは神以上に超自然的能力を付与されることが多かった。一方で、閉じた箱課題では、特に年長児において、おばけよりも神の方が超自然的能力を持つ存在として有力視されていたというように、まずは超自然的存在としてのおばけが概念化され、その後に超自然的存在としての神の概念化が生じることも考えられる。本研究では、単に神よりも多く自発的に言及された存在は何か、神よりも多く超自然的能力を付与された存在は何かという結果に基づく考察に過ぎないため、果たして本当におばけは幼児にとって神よりも先に超自然的能力を持つ存在として認められているかどうかについては、今後さらなる検討が必要であろう。

最後に、神の心の概念の発達プロセスに関しては、幼児は超自然的存在として自発的に神を思い浮かべることはあまりしなかったが、それでも、超自然的存在としての神の概念化は幼児期の 3 歳から 6 歳にかけて発達することが示された。年長児において、両方の課題で超自然的能力を持ちうるとチャンスレベルを超えて有意に判断されたのは神のみであり、人間の能力の限界を捉えたうえで「人間にはできないが神にはできる」とする判断も、年少児から年長児にかけて有意に増加した。また、判断の根拠として「何でも見える」「何でも知っている」という全知への言及が数多く見られたのも神のみであった。人間の能力の限界への言及が年長児で数多く見られたことと併せて考えると、先行研究（Lane et al., 2010; Makris & Pnevmatikos, 2007; 中道 , 2013, 2016）とも一致して、超自然的存在としての神の概念は 5、6 歳頃にその基盤が形成され、それらは人間の能力の限界を把握することで発達していくことが本研究の結果でも裏付けられたと言えよう。

本研究では、日本の幼児が神についてどのような認識を持っているか、その一端を明らかにすることができた。神をはじめとする超自然的存在や彼らが持つとされる超自然的能力に注目し、その認識の起源や発達について検討した実証的研究は、日本においてまだまだ少なく、欧米との文化や宗教の違いという観点も含めて、今後さらなる研究が待たれるところである。

文　献

Barrett, J. L.,（2023）. *なぜ子どもは神を信じるのか？：人間の宗教性の心理学的研究*（松島公望監訳，矢吹理恵・荒川歩編訳）. 教文館 .（Barrett, J. L.,（2012）. *Born Believers: The science of children's religious belief.* Free Press.）

Barrett, J. L., Richert, R. A., & Driesenga, A.（2001）. God's beliefs versus mother's: The development of nonhuman agents concepts. *Child Development*, **72**（**1**）, 50-65.

Barrett, J. L., Newman, R. M., & Richert, R. A.（2003）. When seeing is not believing: Children's understanding of humans' and non-humans' use of background knowledge in interpreting visual displays. *Journal of Cognition and Culture*, **3**（**1**）, 91-108.

小松和彦 .（2012）. *妖怪文化入門* . 角川ソフィア文庫 .

Lane, J. D., Wellman, H. M., & Evans, E. M.（2010）. Children's understanding of ordinary and extraordinary minds. *Child Development*, **81**（**5**）, 1475-1489.

Makris, N., & Pnevmatikos, D.（2007）. Children's understanding of human and super-natural mind. *Cognitive Development*, **22**, 365-375.

中道圭人 .（2011）. 幼児の神様に関する理解：神様は空想上の存在を見ることができるのか？*常葉学園大学研究紀要（外国語学部）*, 27, 365-375.

中道圭人 .（2013）. 日本人幼児における神様の超自然的能力についての概念：神様は何でもお見通しか？*発達研究* , 27, 39-48.

中道圭人 .（2016）. 日本人幼児におけるヒトと神様の知覚能力に関する理解 . *静岡大学教育学部研究報告（人文・社会・自然科学篇）*, 66, 85-92.

Norenzayan, A.（2022）. *ビッグ・ゴッド：変容する宗教と協力・対立の心理学*（藤井修平・松島公望・荒川歩監訳）. 誠信書房 .（Norenzayan, A.（2013）. *Big Gods: How religion transformed cooperation and conflict.* Princeton University Press.）

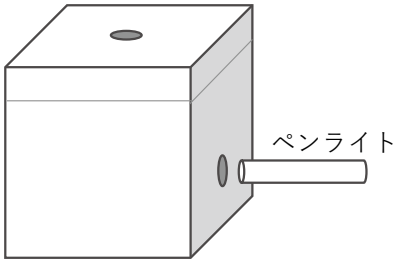
Richert, R. A., & Barrett, J. L.（2005）. Do you see what I see? Young Children's assumptions about God's perceptual abilities. *The International Journal for the Psychology of Religion,* **15**, 283-295.

Richert, R. A., Boyatzis, C. J., & King, P. E.（2017）. Introduction to the British Journal of Developmental Psychology special issue on religion, culture, and development. *British Journal of Developmental Psychology,* **35**, 1–3.

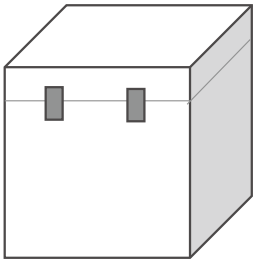
付　記

本論文は、第 2 著者による三重大学教育学部 2023 年度卒業論文で得られたデータを再分析し、新たに論を展開したものです。調査にご協力いただいた幼稚園の先生方及び幼児の皆さんに深く感謝申し上げます。また、本論文は執筆にあたり、令和 2 年度科学研究費補助金・基盤研究（C）（課題番号：20K03364）の助成を受けた。

Appendix　実験で使用した箱



暗い箱課題



閉じた箱課題

研究論文

「さすが」に対応する中国語表現について

周　　世　超

The Corresponding Chinese Expression for the Japanese Word *"Sasuga"*

ZHOU Shichao

〈Abstract〉

This study examines the meanings and usages of various expressions of *sasuga* in modern Japanese, focusing on their corresponding expressions in Chinese. The analysis reveals the following points. First, when modifying verbal or adjectival predicates, *sasuga* corresponds to the Chinese expression "不愧是…还真是…," while *sasugani* corresponds to "但是…果然还是…." Second, when modifying nominal predicates, both *sasuga* and *sasugawa* align with "不愧是," whereas *sasugani* aligns with "果然还是不一样." Third, *sasuga* no can be divided into two uses: when modifying the subject, it corresponds to "连…的…、都…," and when modifying nominal predicates, it corresponds to "名副其实的." Finally, when *sasuga* functions as a predicate, it corresponds to "不愧是＋人称代名詞." Through this analysis, the study clarifies how each variant of *sasuga* conveys a specific nuance in modern Japanese, and how these nuances can be appropriately reflected in Chinese.

キーワード：さすが、中国語表現、構文的分布、意味・機能

1．はじめに

「さすが」という評価の副詞には、「さすが」「さすがに」「さすがは」「さすがの」という4つの形式が存在する。それぞれの形式が示す意味や用法は必ずしも同一ではなく、対応する中国語表現が一対一で対応するとも限らない。しかしながら、これらの諸形式に対して、実際にどのような中国語表現が対応し得るのかについては、先行研究では十分に検討されていない。

そこで本稿では、「さすが」の諸表現に着目し、その構文的分布を踏まえながら、動詞述語・名詞述語・形容詞述語を修飾する場合、主語を修飾する場合、そして述語として機能する場合における意味・用法を総合的に検討する。さらに、各形式のもつ構文的特徴を明らかにするとともに、それらに対応し得る中国語表現を提示することを目的とする。本稿の分析を通じて、日本語の「さすが」と中国語との対照に関する理解を深めるとともに、学習・教育の現場において有益な指針を提供できると期待される。

2．先行研究の問題点と本稿の立場

現代語における「さすが」に関する研究としては、飛田・浅田（1994）、渡辺（2002）、周（2017）、周（2019）、周（2023）などが挙げられる。飛田・浅田（1994：165-166）は、「さすが」の意味について「①価値を再認識する様子（ややプラスのイメージ）」と「②予想通りの結果になる様子（ややマイナスのイメージ）」の二点を示しているが、「さすが」の諸形式（「さすが」「さすがに」「さすがは」「さすがの」など）の間に見られる意味や機能の差異については言及していない。

一方、渡辺（2002：372-377）は、森田（1980）に基づき、現代語としての「さすが」の基本的な用法を次の三つのモデルに整理している。（一）「A はさすがに a だ」、（二）「A も B にはさすがに ā（b）だ」、（三）「さすがの A も B には ā（b）だ」である。また、「A だけあってさすがに a だ」「さすが A だけあって a だ」「さすがは A だ。a だ」は、いずれもモデル（一）である「A はさすがに a だ」の表面的変異にすぎないとし、「さすが」「さすがに」「さすがは」の間に意味的な差異はないと見なし、形式の違いについては深く論じていない。

それに対し、周（2017）は、「さすが」の評価と構文的条件との関係を考察し、文脈によって「さすが」の評価がプラス評価にもマイナス評価にもなり得ることを指摘している。さらに、周（2019）は、「さすが」が「あるものへのプラス評価」を表すのに対し、「さすがに」は「予想通りになる様子」を表すと位置づけ、両者の役割を区別している。周（2023）においては、「さすがに」の基本的な意味を「対立」と捉え、この表現が用いられる文環境には潜在的な「対立関係」が存在することを示唆している。

以上のように、先行研究は主として「さすが」の意味・用法に焦点を当ててきたが、「さすが」に対応する中国語表現に着目した研究は、管見の限りまだ見られない。そこで本稿では、「さすが」の意味・用法に基づき、諸形式の間に見られる意味・機能上の違いを明らかにするとともに、それぞれの用法において「さすが」に対応する中国語表現がどのように捉えられるかを検討する。

以下では、まず 3 節において「さすが」の諸形式の意味・用法を概観し、4 節では各用法に対応する中国語表現を考察した後、5 節でまとめを行う。

3．「さすが」の諸形式の意味・用法の概観

本節では、動詞述語・形容詞述語・名詞述語を修飾する場合、主語を修飾する場合、そして述語として機能する場合に分けて、「さすが」の諸形式がどのように分布し、いかなる意味・用法の違いが見られるかを考察する。

3．1．動詞述語を修飾する場合

動詞述語を修飾する場合には、「さすが」と「さすがに」の両方が用いられるが、両者の示す意味が完全に同一というわけではない。周（2019）の調査に基づいていえば、「さすが」は主に、ある対象へのプラス評価をもつ状態を表す動詞述語を修飾している[(1)]。

（1）「ほう。陛下はさすがご賢察でいらっしゃる。　（恩田陸『ライオンハート』2000）
（2）「なーるほど。さすが美人の女将はやることが違う。あっしがいきなり起こしでもしたら無礼討ちに斬り捨てられてしまいまさあ」　（高橋三千綱『お江戸は爽快』2004）
（3）さすが財閥はちがいますね。　（山村美紗『京都西陣殺人事件』1987）

例（1）～（3）における「さすが」は、それぞれ「ご賢察でいらっしゃる」「やることが違う」「財閥は違う」といったプラスの評価に結びつく状態を表す動詞述語を修飾している。「さすが」には「あの対象であれば当然そうなる」という「予想通り」の意味と、「対象へのプラスの評価」という二つの意味が含まれると考えられる。

一方、「さすがに」も動詞述語を修飾し得る。周（2023）によれば、「さすがに」は状態を表す動詞述語、人の無意志的な動きを表す動詞述語、自然現象を表す動詞述語などを修飾している[(2)]。下記の例（4）（5）（6）はその裏付けである。

（4）普段ならここで引いてしまうところだが、今回はさすがに事情が異なる。
（伊達将範『DADDYFACE』2000）
（5）そういいながら、彼はさすがに気が咎めた。　（三浦哲郎『愛しい女』1982）
（6）黒潮を横断するとき、冬の海は、さすがに荒れていた。
（荒巻義雄『樹々より木漏陽の国』1991）

例（4）～（6）の「さすがに」は、それぞれ「事情が異なる」という状態を表す動詞述語、「気が咎める」という人の無意志的動作を表す動詞述語、「海が荒れる」という自然現象を表す動詞述語を修飾している。この場合、「さすがに」は「しかし、こういう状況になれば、そうなるのも当然である」という含意を伴うとみられる。言い換えれば、「さすがに」には「予想通り」の意味に加えて「しかし」という対立的ニュアンス[(3)]も含まれていると推測される。

3．2．形容詞述語を修飾する場合

形容詞述語を修飾する場合にも、「さすが」と「さすがに」の両方が用いられる。「さすが」は主としてプラスの含みがある形容詞述語を修飾する。その証左として、下記の用例が挙げられる。

（7）「でしょう？　さすが近衛騎士殿はお目が高い！これがあなた、一万エキューとは、破格も破格！　これ以上の屋敷は、トリステイン中を探したって見つかりませんよ！」
（ヤマグチノボル『ゼロの使い魔 第 16 巻』2009）

（8）「さすが吉田さんの弟子は勇ましいな」と、雲浜は笑って、玄瑞に酒をすすめた。
（古川薫『花冠の志士小説久坂玄瑞』1979）

（9）といったのだそうだ。さすがプロは誉め方もうまい。
（群ようこ『無印不倫物語 』1995）

例（7）～（9）の「さすが」は「お目が高い」「勇ましい」「誉め方もうまい」といったプラスの含みをもつ形容詞述語を修飾している。形容詞述語を修飾する場合も、動詞述語を修飾する場合と同様に、「予想通り」の意味と、「対象へのプラス評価」という二つの意味が含まれていると考えられる。

一方、「さすがに」はプラスの含みがある形容詞述語だけでなく、マイナスの含みがある形容詞述語や評価のない形容詞述語にも用いられ、「しかし、この状況ならこうなる」という含意をもつと考えられる。以下の例（10）～（12）を示す。

（10）清志はさすがにうれしかったが、無表情に答えた。（三浦綾子『病めるときも』1982）

（11）七月も下旬の陽ざしが、竜太の目に眩しかった。さすがに満州も暑かった。
（三浦綾子『銃口』1994）

（12）現代ではさすがに瑯琊王のような極端なケースは少ないかもしれない。
（守屋洋『中国古典の家訓集』1990）

例（10）～（12）の「さすがに」がそれぞれ「うれしかった」というプラス評価の形容詞述語、「暑かった」というマイナス評価の形容詞述語、「少ない」という中立的な形容詞述語を修飾している。「さすがに」には、「この状況に至れば、そうなるのは当然だ」という「予想通り」の意味に加え、「しかし」という文脈的対立を示唆する意味も読み取れる。

3．3．名詞述語を修飾する場合

名詞述語を修飾する場合には、「さすが」「さすがは」「さすがの」「さすがに」がいずれも用いられるが、それぞれに異なる意味が見られる。

（13）「おお、さすが社長。一番乗りで発見されるとは」

（三田誠『レンタルマギカ 第01巻』2004）

（14）「さすがは爺さんだ。よく俺の考えてることがわかったな」

（山田正紀『宝石泥棒』1982）

（15）どうしてこういう発想ができるんだろう。さすがの七十歳。

（糸井重里『糸井重里の萬流コピー塾』1988）

（16）「ああ、そいつはいい、さすがに生物の先生だな」　（花輪莞爾『海が呑む』1992）

例（13）～（15）における「さすが」「さすがは」「さすがの」が名詞述語を修飾し、プラス評価を示しているのに対し、例（16）の「さすがに」は「やはりあの対象は違う」という意味を示している。また、「さすが」「さすがは」「さすがに」は副詞として機能するが、「さすがの」は連体修飾語として機能する点で異なる。

3．4．主語を修飾する場合

主語を修飾する場合には、「さすがの」が用いられる。用例から見るに、「さすがの～も」という構文[(4)]が多く、ここでは「たとえあの人物でもこうなるのは当然だ」という意味を示している。

（17）さすがの伯要も、これは雲行きが違うと感じ始めた。

（井上祐美子『五王戦国志6 風旗篇』1997）

（18）さすがの梅川もまばたきして動きを止めた。

（五百香ノエル『天秤座号殺人事件』2000）

（19）ケアルの報告を聞いて、さすがのロト・ライスも大きく目をみひらいた。

（三浦真奈美『風のケアル 第3巻 嵐を呼ぶ烽火』1998）

例（17）～（19）の「さすがの」は、「さすがの～も」という形式で主語を修飾し、「たとえあの人物でもこうなる」という意味を表している。具体的には、例（17）では「たとえ普段あまり表情を変えないフランソワでも心が痛んだ」、例（18）では「たとえ普段落ち

着いている梅川でもまばたきして動きを止めた」、例（19）では「たとえ普段冷静なロト・ライスでも大きく目をみひらいた」というように解釈できる。文脈によってはプラス評価というより「そうならざるを得ない」というニュアンスになる場合もある。すなわち、「さすがの」は必ずしもプラスの評価を示すわけではなく、文脈に応じて多様な意味を担っていると考えられる。

3．5．述語として機能する場合

述語として機能できるのは、「さすが」のみである。この用法では、話者のプラス評価が際立つ。以下の用例が挙げられる。

（20）「さすがだねえ。どこで変わったのか、全然わからなかったよ」
（近藤史恵『散りしかたみに』2001）

（21）勝たねばならぬ状態で勝てるのは、さすがである。
（河口俊彦『人生の棋譜 この一局』1999）

（22）足音を立てないのは流石であった。　（黒岩重吾『落日の王子 蘇我入鹿（下）』1982）

例（20）～（22）の「さすが」は、その対象が「やはり予想通りの力を発揮した」というニュアンスと、「対象へのプラス評価」を表している。述語として機能しているため、感動詞的な用法に近い印象を与えるが、その背景には「予想通り」という意味が常に付随すると考えられる。実際、まったく未知の人物に対して「さすがだ」と述べるのは不自然である。述語として機能する「さすが」には「あの人物ならこれくらいはできるだろう」という事前の想定が存在するからである。

4．「さすが」の諸形式に対応する中国語表現

本節では、3 節で明らかにした「さすが」の意味・用法に基づき、「さすが」「さすがに」「さすがは」「さすがの」に対応する中国語表現について、動詞述語を修飾する場合、形容詞述語を修飾する場合、名詞述語を修飾する場合、主語を修飾する場合、そして述語として機能する場合に分けて考察する。

ここでは、それぞれの日本語表現がもつ意味特性（予想通り、プラス評価、対立・逆接など）と、それに近似する中国語表現の構文的特徴とを照合しながら、日中両言語の対応関係を明確に示したい。とりわけ、動詞述語・名詞述語などの品詞区分だけでなく、予想との一致を中心とする構文か、評価を中心とする構文かといった観点も意識して考察する。

4．1．動詞述語を修飾する場合の「さすが」に対応する中国語表現

動詞述語を修飾する場合には、「さすが」と「さすがに」の両方が用いられる。「さすが」は「あの対象なら当然こうなるだろう」という「予想通り」の意味を含むとともに、その対象へのプラス評価をもっている。そのため、中国語の“不愧是…还真是…”がもっとも自然に対応すると考えられる。

（23）さすが、おゆうはうまいことを言う。　（久世光彦『陛下』1996）
（不愧是悠，还真是会说话。）
（24）さすが美人の女将はやることが違う。　（例（2）を再掲）
（不愧是美女老板娘，做事还真是与众不同。）
（25）さすが財閥はちがいますね。　（例（3）を再掲）
（不愧是财阀，还真是不一样。）

例（23）～（25）が示すように、「さすが」は「あの対象なら当然そうなる」という期待を表しながら、さらに対象に対する肯定・賞賛のニュアンス（プラス評価）を含む。“不愧是”は「名実通り」という意味を示唆し、“还真是”は話者の具体的評価を添えることができる。日本語で「やっぱり予想どおりに素晴らしい」という意味は、中国語で“还真是（本当に）”という副詞・副詞句をもってうまく表現されると考えられる。

一方、「さすがに」が動詞述語を修飾する場合、「しかし、この状況になればそうなるのは当然」という対立・逆接的要素が付与される。そのため、中国語では“但是…果然还是…”が対応関係として妥当だと推測される。下記の用例はその裏付けである。

（26）普段ならここで引いてしまうところだが、今回はさすがに事情が異なる。
（例（4）を再掲）
（要是平常的话可能在这里就撤退了，但是这次果然情况还是不一样。）
（27）はじめて教壇に立ったとき、流石に彼は緊張した。　（梶山季之『わが鎮魂歌』1987）
（但是第一次站上讲台的时候，果然他还是紧张了。）
（28）黒潮を横断するとき、冬の海は、さすがに荒れていた。　（例（6）を再掲）
（但是在黑潮过境的时候，冬天的海果然还是波涛汹涌）

例（26）～（28）において、「さすがに」は「予想通りになる」様子とともに「逆接のニュアンス（しかし）」を伴う。中国語の“但是…果然还是…”も、“但是”が「しかし」

を、“果然还是”が「予想していたとおり」という構文を示し、「さすがに」の「（予想はしていたが、やはり）そうなった」という意味合いを比較的正確に再現できる。

４．２．形容詞述語を修飾する場合の「さすが」に対応する中国語表現

形容詞述語を修飾する場合に用いられるのは、「さすが」と「さすがに」である。形容詞述語を修飾する「さすが」も、動詞述語修飾と同様に「予想通り＋プラス評価」という二重の意味をもつ。ただし、形容詞述語の場合、「さすが」は、「勇ましい」「すごい」などの評価を直接表す形容詞と相性が良いといえる。中国語の“不愧是…还真是…”に訳すのが自然だと考えられる。

（29）さすが、日本のサラリーマンは逃げ足が速い。　（恩田陸『ドミノ』2000）

（不愧是日本的上班族，跑得还真是快。）

（30）「なるほど。さすが腕の筋肉はすごいわね。パラリンピックとか目指してるの？」

（桐生祐狩『夏の滴』2003）

（原来如此，不愧是他，手臂的肌肉还真是厉害。他的目标是参加残奥会么？）

（31）「さすが吉田さんの弟子は勇ましいな」と、雲浜は笑って、玄瑞に酒をすすめた。

（例（8）を再掲）

（“不愧是吉田的弟子，还真是勇敢”云浜笑着给玄瑞倒酒。）

例（29）～（31）における「さすが」は、形容詞述語の「逃げ足が速い」「筋肉はすごい」「勇ましい」を修飾し、「予想通り」の意味に加えて、その対象に対するプラス評価を表している。中国語の“不愧是”が対象を名実通りとして評価し、“还真是”が話者の感想を表出する構造がうまく機能する。「さすが」が表す「やはり」「こういう対象ならではの」という意味合いを中国語の“还真是”で示せるため、「さすが」の持つ予想通りとプラス評価の組み合わせを表現できるといえる。

一方、「さすがに」が形容詞述語を修飾する場合には、プラス評価だけでなくマイナス評価、評価のない形容詞にも幅広く付与できる。基本的には「しかし、この状況ならそうなるだろう」という含意が付随するため、中国語の“但是…果然还是…”に対応させるのが自然だと言える。

（32）アルコールがそれほど好きなわけではないが、よく晴れた日曜日の昼に飲むビールはさすがに美味しい。　（五十嵐貴久『土井徹先生の診療事件簿』2008）

（虽然不是那么喜欢酒，但是在天晴的周日中午喝的那杯啤酒果然还是好喝。）

（33）だが、五人がかりでこられたら、さすがにつらい。

（三雲岳斗『レベリオン 第01巻』2000）

（但是五个人一起来的话，果然还是吃不消。）

（34）現代ではさすがに瑯琊王のような極端なケースは少ないかもしれない。

（例（12）を再掲）

（但是在现代，像琅琊王那样极端的例子果然还是已经很少见了吧。）

例（32）～（34）からも明らかなように、「さすがに」はプラス評価・マイナス評価を問わず、「逆接＋予想通り」の両輪が機能する。この場合、中国語の“但是…果然还是…”を用いれば、逆接（但是）と予想の成就（果然还是）の二つが同時に表現され、日本語の「さすがに」が担う対立・対比の意味も表現できる。

4．3．名詞述語を修飾する場合の「さすが」に対応する中国語表現

名詞述語を修飾する場合、「さすが」「さすがは」「さすがの」「さすがに」が確認される。3節で述べたように、それぞれの形式で意味・機能が異なるため、中国語表現との対応も一様ではない。ここでは四つの形式を順に考察する。

まず、「さすが」については、「あのものならこういうことができる」という予想通りの意味に加え、プラス評価を含むという特徴をもつ。中国語では“不愧是”に近似すると考えられる。

（35）「さすがおねえさま、避けましたね」　（おかゆまさき『撲殺天使ドクロちゃん』2003）

（不愧是姐姐，成功躲开了。）

（36）「正解！さすが探偵さん！」三恵子が拍手をした。

（山口芳宏『雲上都市の大冒険』2007）

（“答对了！不愧是侦探！”三惠子拍起手来。）

（37）「おお、さすが社長。一番乗りで発見されるとは」　（例（13）を再掲）

（哦，不愧是社长。居然第一个发现了。）

例（35）～（37）における「さすが」は、名詞述語（おねえさま / 探偵さん / 社長）を

修飾し、「やはり（その地位や能力からみて）期待どおりだ」という意味を表す。また、話者による肯定的・賞賛的な評価が付随している。中国語の“不愧是”は「名実相応」「まさしく～だ」という含意をもち、「プラス評価」を表すことも可能であるため、名詞述語を修飾する「さすが」との対応関係は自然だといえる。

一方、「さすがは」は「さすが」と同様にプラス評価と予想通りの意味を示すが、文型として「さすがは A だ」のように、A を名詞述語として際立たせる傾向がある。「さすが」と同じように“不愧是”に訳しても差し支えないと認められる。

（38）「さすがは爺さんだ。よく俺の考えてることがわかったな」　（例（14）を再掲）
（“不愧是爷爷。居然明白了我在想的事情。”）

（39）「さすがは推理作家ね」　（鮎川哲也『戌神はなにを見たか』1976）
（不愧是推理作家。）

（40）さすがは医者だ。金をもっている。　（奥田英朗『イン・ザ・プール』2000）
（不愧是医生。真有钱。）

例（38）～（40）における「さすがは」は名詞述語の「爺さん」「推理作家」「医者」を修飾し、「予想通り」の意味やプラス評価を伴い、「～こそが期待に応える存在だ」という取り立ての意味を表している。意味的には「さすが」と大きく変わらず、「予想通り」の意味とプラス評価が同時に表し、副詞的として名詞を修飾する「さすが」と比較すると、文型の違いはあるものの、中国語の“不愧是”で適切に対応することができる。

次に、「さすがの」が名詞述語を修飾する場合、連体修飾語として機能する点が特徴的である。そのため、「さすがの」が名詞述語を修飾する場合は同じく連体修飾機能を持つ形容詞の“名副其实的”という中国語に訳すのが妥当と考えられる。

（41）さすがの老舗、ツアーの数が多い。　（『朝日新聞デジタル』2018 年 11 月 22 日）
（名副其实的老店，组团来的人数真多。）

（42）さすがの働きだった。
（茅田砂胡『デルフィニア戦記 第 03 巻「白亜宮の陰影」』1994）
（名副其实的工作成果。）

（43）さすがの身ごなしである。　（茅田砂胡『デルフィニア戦記 第 07 巻』1995）
（名副其实的身手。）

例（41）～（43）では、「さすがの」が名詞述語の「老舗」「働き」「身ごなし」を修飾しており、“名副其实的”という中国語表現と対応している。中国語の“名副其实的”は「名と実が一致している」「まさしく名にふさわしい」という意味合いをもつ表現であり、「さすがの」がもつプラス評価・期待どおりの意味を表すことができ、「さすがの ＋ 名詞述語」における含意（予想通り、評価が高い）を十分に反映できると考えられる。

さらに、「さすがに」が名詞述語を修飾する場合は、「しかしあの対象は他とは異なり、こういう行動を取るだろう」という「予想通り」のニュアンスを表す。中国語では“果然还是不一样”に対応するものと考えられる。

（44）「ああ、そいつはいい、さすがに生物の先生だな」　（例（16）を再掲）
（生物老师果然还是不一样。）
（45）「呆然としていても優雅にみえるところは、さすがにファッション班というわけか」
（三浦哲郎『愛しい女』1982）
（就算是发呆也看起来很优雅的地方，只能说果然时尚部门还是不一样。）
（46）「さすがにオージェ・ナザーロフ大尉だ。脅しには屈しないか……」
（今野敏『宇宙海兵隊ギガース 4』2006）
（但是奥格纳扎罗夫大尉果然还是不一样。不屈服于威胁。）

例（44）～（46）における「さすがに」は名詞述語の「生物の先生」「ファッション班」「オージェ・ナザーロフ大尉」を修飾している。「さすがに」は、プラス評価だけでなく「他とは違う特別な存在」という含みがある。中国語の“果然还是不一样”という表現では、“果然”が「予想通り」という意味を示し、“还是不一样”が「やはり他と違う」という対比を述べるため、「さすがに」の意味を反映することができる。

以上のように、名詞述語を修飾する場合の対応関係をまとめると、「さすが」「さすがは」は“不愧是”、「さすがの」は“名副其实的”、「さすがに」は“果然还是不一样”に対応していると考えられる。

４．４．主語を修飾する場合の「さすが」に対応する中国語表現

主語を修飾する場合、「さすが」は主に「さすがの～も」という構文で用いられ、「たとえあの人物でも、結局こうなるのは当然だ」という意味を表すと考えられる。そのため、「さすがの」は、中国語の“连…的…、都(也)…”に対応するとみられる。

（47）さすがのゲルマも、この不意打ちを回避することはできなかった。

（太田忠司『まぼろし曲馬団』2005）

（连一向谨慎的盖尔曼也无法躲过这次的突袭。）

（48）ケアルの報告を聞いて、さすがのロト・ライスも大きく目をみひらいた。

（例（19）を再掲）

（听了凯尔的报告，连一向镇定的罗德莱斯也大大地睁开了眼睛。）

（49）さすがの山田も脂汗が浮かんできた。　（近藤唯之『運命を変えた一球』1985）

（连平时一向镇定的山田都冒冷汗了。）

例（47）～（49）における「さすがの」は主語である「フランソワ」「英策」「山田」を修飾し、「さすがの～も」という構文をなしている。この構文は“连…的…、都（也）…”に対応していると考えられる。ここで「さすがの」は、文環境次第で多様な意味を表す点が特徴的である。たとえば、例（47）の「さすがのフランソワも」は“连铁石心肠的弗朗索瓦都”と対応し、例（48）の「さすがのロト・ライスも」は“连一向镇定的罗德莱斯也”と対応し、例（49）の「さすがの山田も」は“连一向镇定的山田都”と対応する。いずれも、「たとえ普段は冷静沈着な人物であっても、今の状況ではそうならざるを得ない」という文脈で用いられる。

本稿の立場では、「さすがの～も」という構文が、中国語の連体修飾語を含む表現、“连…的…、都（也）…”に対応するものであると考える。一見すると、「さすがの～も」は、連体修飾語を含まない“连…都（也）…”という中国語表現に訳しても問題ないように思われるが、以下のような近代語用例を検討すると、連体修飾語を含む形こそが自然な対応であることがわかる。

（50）さすが冷静な巨勢博士も、はじめて、いささか顔に感動をあらわした。

（坂口安吾『不連続殺人事件』1948）

（51）はじめのうちこそ皆珍しがって、捕れるたびに騒いで見たが、しまいにはさすが元気な叔父も少し飽きてきたとみえて、「こう蛸ばかり捕っても仕方がないね」と言いだした。　（夏目漱石『彼岸過迄』1912）

（52）さすが豪気の将軍も、すっかりあわてて赤くなり、口をびくびく横に曲げ、一生けん命、はねおりようとするのだが、どうにもからだがうごかなかった。

（宮沢賢治『セロ弾きのゴーシュ』1934）

例（50）（51）（52）における「さすが」は後続の「冷静な」「元気な」「豪気の」といった連体修飾語と共起し、主語を修飾している。こうした「さすが＋連体修飾語＋主語」という構造は近代語に見られるが、現代語においては極めて少ないか、ほぼ用いられない[(5)]といえる。代わりに、例（50’）～（52’）のように「さすがの～も」という形へと変換すると、自然な現代語表現になる。

（50’）さすがの巨勢博士も、はじめて、いささか顔に感動をあらわした。
（51’）はじめのうちこそ皆珍しがって、捕れるたびに騒いで見たが、しまいにはさすがの叔父も少し飽きてきたとみえて、「こう蛸ばかり捕っても仕方がないね」と言いだした。
（52’）さすがの将軍も、すっかりあわてて赤くなり、口をびくびく横に曲げ、一生けん命、はねおりようとするのだが、どうにもからだがうごかなかった。

つまり、現代語の「さすがの～も」は、近代語で見られた「さすが＋連体修飾語＋主語」の構造が変化・吸収されて生じた表現と推測される。そのため、主語を修飾する「さすがの」を中国語に訳す場合には、元来の連体修飾語に相当する意味要素も意識して再現する必要がある。具体的には、“连…的…、都(也)…”のように、連体修飾語（“一向谨慎的”など）を含む形を用いることで、「普段はこういう特徴をもつ人だが、今回に限ってこのように変化した」という含意を表すことができる。

４．５．述語として機能する場合の「さすが」に対応する中国語表現

述語として機能する場合は、主に「さすが」という表現が用いられる。この用法では「さすが」が“不愧是＋人称代名詞”に対応すると考えられる。

（53）「さすがだねえ。どこで変わったのか、全然わからなかったよ」（例（20）を再掲）
（不愧是你。哪里变了，我完全没看出来。）
（54）勝たねばならぬ状態で勝てるのは、さすがである。（例（21）を再掲）
（在不能失败的状态下取胜，不愧是你。）
（55）足音を立てないのは流石であった。（例（22）を再掲）
（不发出一点脚步声这点，不愧是你。）

例（53）（54）（55）の「さすが」は述語として機能し、感嘆・感動詞的な役割をも果た

し、あの人物なら「やはり期待どおり」というニュアンスとプラス評価を示す。中国語の“不愧是＋人称代名詞”には「名実通り」を示す意味合いが含まれ、話者のプラス評価を示す機能もある。中国語の“不愧是＋人称代名詞”も「さすが」という感覚を名実通りに伝えられる。未知の相手に対しては不自然であり、すでに潜在的な期待がある関係にのみ成立する点も共通していると考えられる。

5．まとめ

本稿では、現代語における「さすが」の諸表現の意味・用法を考察し、それぞれに対応する中国語表現を検討した。分析の結果を改めてまとめると、以下のように整理できる。

①動詞述語や形容詞述語を修飾する場合、「さすが」は中国語の“不愧是…还真是…”に対応し、「さすがに」は中国語の“但是…果然还是…”に対応する。
②名詞述語を修飾する場合、「さすが」と「さすがは」は、“不愧是”という中国語に対応し、「さすがに」は“果然还是不一样”という中国語に対応する。
③「さすがの」は主語を修飾する場合と名詞述語を修飾する場合に分けられる。主語を修飾する場合、「さすがの」は“连…的…、都…”という中国語に対応し、名詞述語を修飾する場合、「さすがの」は“名副其实的”中国語に対応する。
④述語として機能する場合、「さすが」は中国語の“不愧是＋人称代名詞”に対応する。

本稿の結果は、中国出身の日本語学習者が日本語における副詞「さすが」を理解する際の一助となる可能性を示唆するものである。しかしながら、具体的な対応・非対応関係については、「さすが」の各表現のもつ構文的特徴と、それに対応する中国語表現の構文的特徴をより詳細に解明する必要がある。また、本稿では、用例に基づく暫定的な対応として提案するが、より大規模な対訳データによる検証が望まれる。これらの課題については、今後の研究に委ねたい。

注

(1)「さすが」と「さすがに」の修飾機能は，周世超（2019）を参考にし，まとめたものである．
(2)「さすがに」は人の意志的な動きを表す動詞述語を修飾することも可能であるが，「さすがに頷いた」のように，やむを得ず頷いたという意味合いを帯びる場合がある．本稿では，このような用例は「さすがに」が人の無意志的動きを表す動詞述語を修飾する場合の機能と大差ないとみなし，対象外とした．「さすがに」が動詞述語を修飾する場合の構文的分布は，周世超

（2023）を参照されたい．

(3)「さすがに」に「しかし」という意味が含まれている点は，用例調査によって明らかにされた．「さすがに」の被修飾語に相反する事実が含まれる場合や，「今回は」のような対比を示す要素が文脈に存在する場合，「さすがに」が用いられる傾向が確認された．この点については，周世超（2023）を参照されたい．

(4)「さすがに＋第一人称＋でも / にも」といった形もあるが，「さすがの～も」と同じ意味になるため，本稿では対象外とする．

(5) この観点は，「さすが」の文法性判断において，12 名中 11 名が「不自然である」と答えた結果によって支持される．

参考文献

周世超（2017）「「さすが」の意味・機能に関する考察」『鹿児島国際大学大学院学術論集』9，pp.33-42.

周世超（2019）「「さすが」と「さすがに」の役割分担について」『日本語文法』19（2），pp.83-99

周世超（2023）「「さすがに」の意味・用法と使用条件について―動詞述語を修飾する場合を中心に―」『日中対照研究』25，pp.61-75.

飛田良文・浅田秀子（1991）『現代形容詞用法辞典』東京堂出版 .

吉川武時（1974）「日本語の動詞に関する一考察」『日本語学校論集』1，pp.67-76.

渡辺実（1997）「難語「さすが」の共時態と通時態」『上智大学国文学科紀要』14，pp.3-30.

渡辺実（2001）『さすが！日本語』筑摩書房 .

渡辺実（2002）『国語意味論』塙書房 .

付記

本稿は、日中対照言語学会第 41 回大会（2019 年 5 月 19 日、明海大学）での口頭発表を基に作成したものであり、筆者が 2019 年に提出した博士論文「日本語と中国語における真逆の評価を表す副詞の対照研究」の第 10 章をもとに加筆・修正を施したものである。

研究論文

2024年度後期日本人チューター学生対象調査報告

正　路　真　一

Research with Japanese Student Tutors from Fall 2024

SHOJI Shinichi

〈Abstract〉

This paper reports the research with Japanese student tutors for international students at Mie University in the Fall semester in 2024. The research utilized data from the student tutors' reports and that from a survey conducted with the student tutors. The outcome indicated that most Japanese student tutors were heling for international students' daily lives, rather than for the international students' studies. Also, Japanese student tutors found benefits from their communications with international students; benefits such as gaining intercultural experiences, getting interested in foreign cultures and languages, noticing differences of their own language (Japanese) from other languages, and so forth. However, the survey results detected some tutors who had problems in their relationships with international students. In order to solve this problem, the Center for International Education and Research, Mie University, might need to consider the genders of a tutor and an international student when matching them.

キーワード：チューター、日本人、外国人、留学生、学び

1．はじめに：チューター制度

1980年代以降、文部省（現文部科学省）が外国人留学生の受け入れを推進してきた中、日本人学生と外国人留学生を1対1でマッチングし、日本人学生が外国人留学生の勉学や生活を助けるというチューター制度が成立した（濱田・根本・山﨑　2012，大塚　2016）。現在に至るまでに、ほとんどの国立大学がチューター制度を採用しているが、三重大学でも、新渡日外国人留学生に対し、留学後の初学期の初めの3か月間、希望者に限り日本人学生チューターを紹介している。チューターになった日本人学生の具体的な業務内容としては、日本語科目及び専門科目の勉学のサポート、そして日本での生活のサポート（学務手続き、役所手続き、銀行口座開設、携帯電話購入、電気ガス料金の支払いなどを含む）のいずれかと説明されている（三重大学　2024）。ただしチューターの業務は細かく規定されているわけではなく、三重大学国際交流センター所属の外国人留学生を担当する日本人

チューター学生の場合は、週一回ないしは二週間に一回外国人留学生と会って、30 分から 1 時間程度の会話をするという活動も推奨されており、この活動も広く勉学のサポートまたは生活サポートの業務に含まれている。この活動中の会話の内容は、外国人留学生が受講する科目の勉学を手伝うという場合もあるが、単におしゃべりするという「話し相手」の役割も含まれる。これは、留学生にとっては、日本人との交流の機会が得られること、日本語での会話の練習の機会が得られること、ともすれば孤独に陥ってしまう外国生活の中で人と話す機会が得られることなどの利点がある。日本人チューター学生にとってはただ世間話をするだけということもあるが、外国人留学生が日本生活に慣れる過程においては、チューターが「友人」という存在になり得る重要な機会であると考えられる。高知大学の報告（大塚　2016）によると、特に文系学部の日本人チューターの業務内容として、最も多かったのが日本語の勉強のサポート、次いで多かったのが話し相手であった。チューターは留学生にとって学習、生活の実務上の助けとなるばかりでなく、友情の成立をもたらし得る存在でもある（園田　2008，田中・椎名　2019）

三重大学の外国人留学生に日本人チューター学生をマッチングする際は、基本的には個々の外国人留学生の担当教員が、チューターになってくれる日本人学生を見つけるのが慣例である。ただし、これが難しい場合は、国際交流センターが確保しているチューター希望学生（チューターになることを希望する日本人学生）のリストの中からチューターが選ばれる。国際交流センター所属の外国人留学生を担当する日本人チューター学生の場合、前述の通り、一週間ないし二週間に一度、担当する留学生と会うことが多いのであるが、会う日時の決定や頻度は、日本人チューター学生と外国人留学生の直接交渉に任され、国際交流センター教員はほとんど関与していない。日本人チューター学生は、1 時間の業務につき学部生は 1050 円、大学院生は 1100 円が謝金として支払われるが、謝金が支払われる上限は 15 時間以内と定められている。

チューター制度は元来外国人留学生の助けとなるものとして成立しているが、チューターとなる日本人学生にも様々な教育的効果がもたらされる。過去の報告においては、日本人学生にとって、チューターをするという経験が、異文化理解、異文化コミュニケーション技術の習得、言語に対する気づきや学びの促進、自己の勉学に対する取り組み方の再考、教えるという経験の獲得、自身の進路における視野の拡大といった学びに繋がる（園田　2008，副田　2010，岡部　2018，田中・椎名　2019）。一方、留学生と相性が合わなかったり、会う時間を調整するのが難しかったり、自身または留学生の語学能力の不足によってコミュニケーションに苦労したりといったケースもあるようで、結局日本人チューターと外国人留学生が定期的に会わなくなるという場合もある。岡山大学の外国人留学生を対象とした

調査（宇塚・岡　2016, 宇塚・廣田・岡　2019）によると、定期的に日本人チューター学生と会わなかったという外国人留学生が 30%強であった。また、定期的に日本人チューター学生と会った外国人留学生の方が、定期的に会わなかった外国人留学生よりも満足度が有意に高いということが示された。

本稿では、2024 年度後期に筆者が担当教員となった外国人留学生のチューターを務めた日本人学生を対象とし、実施した調査結果の内容を報告する。

2．調査：協力者と方法

本調査の資料となったのは、日本人チューター学生たちがチューター業務期間の終了後に提出した実施報告書と、同じく業務期間終了後に回答したアンケートの結果である。これらの資料を提出してくれたのは、延べ 17 名の日本人チューターである。一人のチューターが二人の外国人留学生を担当したので、日本人チューター学生の実数は 16 名であるが、資料となった実施報告書とアンケートの回答は、担当留学生一人につき一回提出してもらったので、日本人チューター学生の人数を延べ人数の 17 名として報告する。

本稿では、17 名の日本人チューター学生を A～Q のアルファベットで表す。各日本人チューター学生が担当した外国人留学生の母国と日本語レベルを表 1 に示す。ここで言う

表 1. 日本人チューター学生および担当した外国人留学生

日本人チューター学生	担当した留学生の母国	留学生の日本語レベル
A	ベトナム	上級
B	ベトナム	上級
C	ベトナム	上級
D	ベトナム	中級 2
E	ベトナム	中級 2
F	ベトナム	中級 2
G	インドネシア	上級
H	中国	上級
I	中国	上級
J	中国	中級 2
K	中国	中級 2
L	中国	中級 2
M	台湾	中級 1
N	韓国	初級 3
O	韓国	初級 1
P	ドイツ	初級 2
Q	フランス	初級 1

日本語レベルとは、三重大学国際交流センターが作成したプレースメントテストを新渡日留学生が受験した結果によるもので、日本語能力が高い者から低いものまで順に上級、中級 2、中級 1、初級 3、初級 2、初級 1 の六段階に分けられる。

業務期間終了後に日本人チューター学生が提出した実施報告書に報告されているのは、各日本人チューター学生が担当の外国人留学生に会った日時と回数、そして会った時に従事した業務内容である。ここに報告される業務内容とは、「生活支援」、「日本語指導」、「専門領域学習に関する指導」の三つから選ぶことになっている。また、同じく業務期間終了後に日本人チューター学生が回答したアンケートは Google フォームで作成され、各自、氏名記入の上オンラインで解答してもらった。アンケートで聞いた質問は下の通りである。

1. 名前
2. 担当した留学生の母国
3. 担当した留学生とはどの言語で話すことが多かったですか。（選択回答）
   日本語だけ　/　日本語の方が多かったが外国語も使った　/
   外国語の方が多かったが日本語も使った　/　外国語だけ　/　その他
4. 担当した留学生と話す時、外国語も使った人は何の言語を使いましたか。
5. 自分の外国語能力の不足によって、留学生とのコミュニケーションが難しいと感じたことはありましたか。（選択回答）
   よくあった　/　時々あった　/　なかった　/　外国語を使わなかったので、無回答
6. 担当した留学生の日本語能力の不足によって、留学生とのコミュニケーションが難しいと感じたことはありましたか。（選択回答）
   よくあった　/　時々あった　/　なかった　/　日本語を使わなかったので、無回答
7. 言語以外の面で、チューターの仕事が難しいと思うことがありましたか（文化の違い、スケジュール設定、その他）。あったら、どんなことが難しかったか簡単に説明してください。
8. 担当した留学生と交流する際、どんな気持ちになりましたか。（選択回答・複数回答可）
   楽しい　/　自分の学びになる　/　自分にとって良い経験になる　/
   つまらない　/　会いに行くのが億劫　/　その他
9. 担当した留学生と自分の仲はどうでしたか。（選択回答）
   とても仲良くなった　/　仲良くなった　/　どちらとも言えない　/
   仲良くならなかった　/　全然仲良くならなかった　/　その他
10. 全体的に振り返って、チューターをしてよかったと思いますか。（選択回答）
   とても良かった　/　良かった　/　どちらとも言えない　/
   良くなかった　/　全然良くなかった　/　その他
11. チューター業務の期間が終わった後も、担当の留学生と会う意欲はありますか。（選択回答）
   会いたい　/　会ってもいい　/　どちらとも言えない　/　会いたくない　/　その他

12. チューターの仕事に関する感想、具体的なエピソード、改善すべき点などがあれば是非教えてください。

3．結果

3．1　チューターと留学生が使った言語

ここでは、日本人チューター学生が留学生と話す時に使った言語について聞いたアンケートの質問 3、4、5、6 の結果を報告する。まず、質問 3「担当した留学生とはどの言語で話すことが多かったですか」と質問 4「担当した留学生と話す時、外国語も使った人は何の言語を使いましたか」の結果を、表 1 に加筆する形で下の表に示す。

表 2. 日本人チューター学生と外国人留学生が使った言語

日本人チューター学生	担当した留学生の母国	留学生の日本語レベル	質問 3「担当した留学生とはどの言語で話すことが多かったですか」	質問 4「担当した留学生と話す時、外国語も使った人は何の言語を使いましたか」
A	ベトナム	上級	日本語だけ	―
B	ベトナム	上級	日本語だけ	―
C	ベトナム	上級	日本語の方が多かったが、外国語も使った。	英語
D	ベトナム	中級 2	日本語だけ	―
E	ベトナム	中級 2	日本語の方が多かったが、外国語も使った。	英語
F	ベトナム	中級 2	日本語の方が多かったが、外国語も使った。	英語、ベトナム語
G	インドネシア	上級	日本語の方が多かったが、外国語も使った。	英語
H	中国	上級	日本語だけ	―
I	中国	上級	日本語の方が多かったが、外国語も使った。	英語
J	中国	中級 2	日本語の方が多かったが、外国語も使った。	英語
K	中国	中級 2	日本語だけ	―
L	中国	中級 2	日本語だけ	―
M	台湾	中級 1	日本語の方が多かったが、外国語も使った。	英語
N	韓国	初級 3	日本語の方が多かったが、外国語も使った。	英語、韓国語
O	韓国	初級 1	外国語だけ	英語
P	ドイツ	初級 2	日本語の方が多かったが、外国語も使った。	英語
Q	フランス	初級 1	外国語の方が多かったが、日本語も使った。	英語
			合計 日本語だけ：6 名 日本語の方が多かったが外国語も使った：9 名 外国語の方が多かったが日本語も使った：1 名 外国語だけ：1 名	合計 英語：11 名 ベトナム語：1 名 韓国語：1 名

日本人チューター学生と外国人留学生が話す時に使った言語は、「日本語の方が多かったが外国語も使った」という回答が最も多く、「日本語だけ」がそれに続く。その他、外国語だけを使ったという回答が 1 名、外国語の方が多かったが日本語も使ったという回答が 1 名であった。これを外国人留学生の日本語レベルと照らし合わせると、初級 3 レベル以上の外国人留学生とは、概ね日本語でのコミュニケーションが大勢を占めているようである。一方、外国語使用の有無は、外国人留学生の出身国によるところも大きいと推察される。ヨーロッパや東南アジアの学生の多くは英語に堪能であるが、中国や韓国の学生は日本と似て英語を話さない学生も多いからである。

次に、質問 5「自分の外国語能力の不足によって、留学生とのコミュニケーションが難しいと感じたことはありましたか」と質問 6「担当した留学生の日本語能力の不足によって、留学生とのコミュニケーションが難しいと感じたことはありましたか」の結果を、質問 3、4 の結果と併せて次頁の表にまとめる。（「外国語を使わなかったので無回答」、「日本語を使わなかったので無回答」という回答は「－」で示す。）

チューター自身の外国語能力の不足によってコミュニケーションが難しいと感じたことは「なかった」とする回答が最も多い。これは特に外国語で話すことが少なかったと質問 3 で答えた日本人チューター学生（つまり日本語能力が高い留学生を担当した場合）に多いが、外国語を使う機会が多かったチューターには、「よくあった」「時々あった」という回答も散見される。逆に、外国人留学生の日本語能力の不足によってコミュニケーションが難しいと感じたことは、「時々あった」、「なかった」という回答が多い。質問 6 の回答は、外国語で話すことが多かったか少なかったかに（つまり担当した外国人留学生の日本語レベルに）関わらないようである。

3．2　言語以外の面での難しさ

ここでは、アンケートの質問 7「言語以外の面で、チューターの仕事が難しいと思うことがありましたか（文化の違い、スケジュール設定、その他）。あったら、どんなことが難しかったか簡単に説明してください」の結果を報告する。困難はなかったという回答を除き、報告されたのは以下の通りである。（原文ママ）

- スケジュールの決め方や次の予定の立て方
- 相手が都合がいいのが火曜日だったものの、自分の授業がかぶっていることや研究の進捗が芳しくなかったため会える日が少なかった (自己都合で申し訳ないです)。相手が少し緊張しているようだったため自分からアポイントメントを積極的にとるべきか迷った。
- 担当した留学生の方は、日本語がとても流暢で、連絡にもしっかり対応してくれたため、コミュ

表 3. 言語能力の不足によるコミュニケーションの難しさ

日本人チューター学生	留学生の日本語レベル	質問 3	質問 4	質問 5「自分の外国語能力の不足によって、留学生とのコミュニケーションが難しいと感じたことはありましたか」	質問 6「担当した留学生の日本語能力の不足によって、留学生とのコミュニケーションが難しいと感じたことはありましたか」
A	上級	日本語だけ	―	―	時々あった
B	上級	日本語だけ	―	―	なかった
C	上級	日本語の方が多かったが、外国語も使った。	英語	なかった	時々あった
D	中級 2	日本語だけ	―	―	時々あった
E	中級 2	日本語の方が多かったが、外国語も使った。	英語	なかった	なかった
F	中級 2	日本語の方が多かったが、外国語も使った。	英語，ベトナム語	なかった	なかった
G	上級	日本語の方が多かったが、外国語も使った。	英語	なかった	なかった
H	上級	日本語だけ	―	―	時々あった
I	上級	日本語の方が多かったが、外国語も使った。	英語	時々あった	なかった
J	中級 2	日本語の方が多かったが、外国語も使った。	英語	なかった	時々あった
K	中級 2	日本語だけ	―	―	なかった
L	中級 2	日本語だけ	―	―	時々あった
M	中級 1	日本語の方が多かったが、外国語も使った。	英語	なかった	時々あった
N	初級 3	日本語の方が多かったが、外国語も使った。	英語，韓国語	よくあった	よくあった
O	初級 1	外国語だけ	英語	時々あった	―
P	初級 2	日本語の方が多かったが、外国語も使った。	英語	よくあった	時々あった
Q	初級 1	外国語の方が多かったが、日本語も使った。	英語	なかった	なかった
				合計 よくあった：2 名 時々あった：2 名 なかった：7 名	合計 よくあった：1 名 時々あった：8 名 なかった：7 名

ニケーションやスケジュール設定などに困ることは全くありませんでした。文化の違いは、おそらくお互い、「文化は違って当然」というスタンスだったこともあり、「ベトナムではどうなの？」や「ベトナムにもあるの？」、「日本ではどうなの？」などとお互いよく聞いていたので、日本の文化も少し知ってもらうことができたと思うし、ベトナムの文化を沢山教えてもらえて、興味深かったし、嬉しかったです。ごく稀に、留学生の子の日本語の使い方が違うと思うことがあったが、どこまで言ったらいいのかが難しかったです。

- 交流する日程を合わせること
- 集合場所の決定
- 自分もよく分からない書類のことを聞かれたりした時
- 基本連絡は日本語で行なっていましたので、言語力の問題でうまく伝わってなかった時があったように思います
- 会う約束をしていた日に留学生が体調が悪いと言っていたので会うのを辞めたが、学校でその留学生が友達と楽しそうに歩いているのを見てしまった。そこから会うのが億劫になってしまい、会うことが無くなった。このようになる前に自分ができることがあったと感じる。

チューター業務上の困難として寄せられた 8 名の回答のうち、4 名の回答は会う時間や場所を決めることに関するもので、最も多かった。また、留学生の日本語の間違いをどこまで指摘すればいいのかが難しかったという意見もあった。注目すべきは、「会う約束をしていた日に留学生が体調が悪いと言っていたので会うのを辞めたが、学校でその留学生が友達と楽しそうに歩いているのを見てしまった」という報告があったことで、こうした事案には対応策を考える必要があるかもしれない。

3．3　チューターの業務内容

ここでは、チューター業務実施報告書に示された、日本人チューター学生が外国人留学生と会った時間数（上限 15 時間）とその都度（一時間ごと）の業務内容を確認する。業務報告書においては、前述の通り、チューター日本人学生が外国人留学生と会うたびに、その回の業務を「生活支援」、「日本語指導」、「専門領域に関する指導」に分けて報告することになっており、例えば外国人留学生の日本語科目の勉学の手伝いをしたなら「日本語指導」になる。ただし、日本語で会話しただけの場合、その業務内容が「生活支援」になるのか「日本語指導」になるのかは、日本人チューター学生の判断に任されている。業務内容の分別を、次頁の表にまとめる。

表 4. 日本人チューター学生が外国人留学生と会った時間数と業務内容

日本人チューター学生	担当した留学生の母国	留学生の日本語レベル	会った回数	「生活支援」	「日本語指導」	「専門領域に関わる指導」
A	ベトナム	上級	2	1	1	
B	ベトナム	上級	13	3	10	
C	ベトナム	上級	15	13	2	
D	ベトナム	中級 2	3			3
E	ベトナム	中級 2	15	15		
F	ベトナム	中級 2	15	13	2	
G	インドネシア	上級	15	14	1	
H	中国	上級	15	8	7	
I	中国	上級	8	6		2
J	中国	中級 2	15	15		
K	中国	中級 2	15		15	
L	中国	中級 2	15		15	
M	台湾	中級 1	15	15		
N	韓国	初級 3	15	15		
O	韓国	初級 1	15	12	3	
P	ドイツ	初級 2	5	3	2	
Q	フランス	初級 1	15	15		

日本人チューター学生が外国人留学生と会った時間数は、上限の 15 時間が最も多いが、中には 2 時間、3 時間、5 時間といった回答も見られることから、チューターと留学生の交流が少なかった場合もあることが分かる。また、業務内容としては「生活支援」が最も多く、次いで「日本語指導」となっており、「専門領域に関わる指導」はほとんどない。日本人チューター学生が行った業務としては、勉学の指導よりも「生活支援」に分別されるものが大部分を占めることが分かる。また、業務内容と外国人留学生の日本語レベルには相関は無いようである。

3．4　日本人チューター学生からの印象

ここでは、アンケートで日本人チューター学生の印象を調べた質問 8「担当した留学生と交流する際、どんな気持ちになりましたか」、質問 9「担当した留学生と自分の仲はどうでしたか」、質問 10「全体的に振り返って、チューターをしてよかったと思いますか」、質問 11「チューター業務の期間が終わった後も、担当の留学生と会う意欲はありますか」の結果を次頁の表にまとめて報告する。

表 5. 日本人チューター学生からの印象

日本人チューター学生	質問 8「担当した留学生と交流する際、どんな気持ちになりましたか」	質問 9「担当した留学生と自分の仲はどうでしたか」	質問 10「全体的に振り返って、チューターをしてよかったと思いますか」	質問 11「チューター業務の期間が終わった後も、担当の留学生と会う意欲はありますか」
A	楽しい、自分の学びになる、自分にとって良い経験になる	どちらとも言えない	良かった	会いたい
B	楽しい、自分の学びになる、自分にとって良い経験になる	とても仲良くなった	とても良かった	会いたい
C	楽しい、自分の学びになる、自分にとって良い経験になる	とても仲良くなった	とても良かった	会いたい
D	楽しい	どちらとも言えない	良かった	どちらとも言えない
E	楽しい	とても仲良くなった	とても良かった	会いたい
F	楽しい、自分の学びになる、自分にとって良い経験になる	とても仲良くなった	とても良かった	会いたい
G	楽しい、自分の学びになる、自分にとって良い経験になる	とても仲良くなった	とても良かった	会いたい
H	楽しい、自分の学びになる、自分にとって良い経験になる	仲良くなった	良かった	会いたい
I	楽しい、自分にとって良い経験になる	どちらとも言えない	良かった	会いたい
J	楽しい、自分の学びになる、自分にとって良い経験になる	とても仲良くなった	とても良かった	会いたい
K	楽しい	とても仲良くなった	とても良かった	会いたい
L	自分の学びになる	仲良くなった	良かった	会ってもいい
M	楽しい、自分にとって良い経験になる	とても仲良くなった	とても良かった	会いたい
N	自分にとって良い経験になる	どちらとも言えない	良かった	会ってもいい
O	楽しい、自分の学びになる、自分にとって良い経験になる	とても仲良くなった	とても良かった	会いたい
P	自分にとって良い経験になる , 会いに行くのが億劫	仲良くならなかった	良かった	どちらとも言えない

Q	楽しい、自分の学びになる、自分にとって良い経験になる	とても仲良くなった	とても良かった	会いたい
	合計 楽しい：13 回答 自分の学びになる：10 回答 自分にとって良い経験になる：11 回答 会いに行くのが億劫：1 回答	合計 とても仲良くなった：10 名 仲良くなった：2 名 どちらとも言えない：4 名 仲良くならなかった：1 名 全然仲良くならなかった：0 名	合計 とても良かった：10 名 良かった：7 名 どちらとも言えない：0 名 良くなかった：0 名 全然良くなかった：0 名	合計 会いたい：13 名 会ってもいい：2 名 どちらとも言えない：2 名 会いたくない：0 名

どの質問に対しても肯定的な回答が多い。質問 8 に対しては「（留学生と交流する際）楽しい」、「自分の学びになる」、「自分にとって良い経験になる」が多く、質問 9 に対しては「（留学生との仲は）とても仲良くなった」が大勢を占め、質問 10 には「（チューターをして）とても良かった」という回答が、質問 11 には「（今後も留学生と）会いたい」という回答が最も多い。ただし、こうしたアンケートに対しては（特に記名式の場合）、一般的に肯定的な回答をする学生が多いように思われるため、ここでは否定的な回答に注目する。まず「（留学生と交流する際）会いに行くのが億劫」、「（留学生との仲は）仲良くならなかった」、「（今後も留学生と会いたいかは）どちらとも言えない」と回答した学生 P は、質問 7 で「会う約束をしていた日に留学生が体調が悪いと言っていたので会うのを辞めたが、学校でその留学生が友達と楽しそうに歩いているのを見てしまった」と回答したのと同じ学生である（3.2 参照）。質問 7 に回答された経験が、この日本人チューター学生に、全体的に否定的な印象を与えた感がある。結局、このチューター学生は、合計 5 時間だけしか担当留学生と会わなかったようで、10 月初めから 12 月末までのチューター業務期間のうち、10 月 21 日以降一度も会わなかったようである。

また、「（留学生との仲は）どちらとも言えない」、「（今後も留学生と会いたいかは）どちらとも言えない」と回答した日本人チューター学生 D は、3 時間しか留学生と会わなかった学生である（3.3，表 4 参照）。これは質問 7 で、「交流する日程を合わせること（が難しかった）」と回答した学生で（3.2 参照）、後述するように、アンケートの最後の質問にもその旨が報告されている。また、「（留学生との仲は）どちらとも言えない」と回答した学生 A は、質問 7 で「相手が少し緊張しているようだった」と回答した学生であり（3.2 参照）、外国人留学生の方に遠慮があったかもしれない。

3．5　チューターからのコメント

最後に、アンケートの質問 12「チューターの仕事に関する感想、具体的なエピソード、改善すべき点などがあれば是非教えてください」の回答を、「特に無し」とする回答を除き、下にまとめて報告する。（原文ママ）

- ベトナムのことを教えてくれたり（お正月のことや観光地のことなど）、一緒にベトナム料理、日本のカレーを作ったりしてとても楽しかったです。
- とてもポジティブな子だったのでやりやすかったです。積極的に彼女から日本語の会話練習も誘ってくれた。
- 予定が中々合わなかったので、少し残念ではありましたが、外国人留学生と交流する良い機会でした。
- 会う時に毎回 iPad や紙とペンがあれば日本語を教えながら会話もより分かりやすくなると思う
- 留学生の方ととても仲良くなれて、ベトナムのことが沢山知れたし、海外への興味がさらに高まりました。 留学生の方は、ベトナム語だけでなく、英語や日本語も本当に上手くて、いい刺激になったし、尊敬します。 あと、日本のラーメンが塩っぱいと言っていたのが驚きでした。ベトナムの留学生は、辛いものに強くて、ありえない量の香辛料をラーメンに入れていて、爆笑したこともいい思い出です。 また機会があれば、ぜひチューターをやりたいなと思います。もっと具体的にどのようなことをした方がいいみたいなことを、先生側からも言って頂けると、より良い留学生活のお手伝いができるのかなと思います。
- 名古屋駅に遊びに行った時はとても楽しかったです
- 初めてチューターをしましたが、日本や留学生の出身国の文化についてたくさんのことを共有できた点で自分の学びになり、面白かったです。また、留学生が日本語の文法についての質問を積極的に私にしてくれましたが、日本人の私でも普段意識しない日本語の文法が多々あり、日本語の文法面でも自分の学びにつながりました。
- とてもポジティブで前向きな子だったので、私が落ち込んでいる時にも元気がもらえました。
- 留学生の方からの日本語についての質問に答えたとき、喜んでもらえてうれしかった。中国での大学生活や、中国の美味しい食べ物、日本の美味しい食べ物やおすすめの観光地について沢山おしゃべりをして、とても楽しかった。
- 相手の留学生は自分の使う SNS アプリをあまり使わないことがあり、連絡をして会う日を決める時に少し苦労した
- 相性がよかったようで、私の実家にお泊りに来たり、まだ漠然とですが彼女の母国に遊びに行く予定をたてたりしています。今後の人生においても、仲良くしたい友人が出来たので、このチューターに参加して本当に良かったと感じています。
- 韓国の様々なことを知ることができた。韓国にまた行きたくなりました。
- お互いの国の文化についてたくさん話すことが出来、またいろんな日本食を食べに行ったこと

で楽しい時間を過ごすことが出来ました。

- 会話は英語が多く、たまに日本語の授業のアウトプットとして日本語を教える程度でしたが、その少しの時間でも相手の日本語力の向上を感じることが出来ました。
- RA として国際寮に住んでいるため、予定していないタイミングでも担当留学生と顔を合わせる機会が多かった。そのため改まって会う予定を立てることが無くなり、不定期での交流となってしまった。
- 趣旨とは逸れるかもしれませんが、SNS でヘリコプターの動画をアップロードしていて、普段当たり前だと思っていたものが相手にとっては珍しいものなのか ... と少し驚きました

日本人チューター学生の回答に見られるように、一緒に料理をした、一緒に名古屋に遊びに行った、チューターの実家に留学生が泊まったといったように、学内で会話をしたり勉学のサポートをしたりするに留まることなく、特に深く交流した学生たちが 3 名いた。また、ベトナム、韓国、中国等、担当する留学生の母国について学んだとする日本人チューター学生も 5 名いた。中にはベトナムや韓国への興味が増した、またはこれらの国に行きたくなったとするチューター学生も 2 名おり、実際に留学生の母国に遊びに行く計画を立てている学生も 1 名いる。さらに、複数の言語が堪能な外国人留学生を担当した日本人チューター学生からは、言語学習の面で刺激になったという感想が得られた。一方、外国人留学生と交流する中で、自分の言語（日本語）の文法についての学びがあったとする学生、日本語を教える（日本語に関する質問に答える）ことで喜びを感じたとする学生も見られる。

一方、日本人チューター学生と外国人留学生の交流に際しての提言もいくつかあった。例えば、会う時に毎回 iPad や紙とペンがあった方がいい、また外国人留学生と何をすればいいかを具体的に教員から提言した方がいいという意見が提起された。

4．考察

前章の最後の 3.5 節に報告した日本人チューター学生の声について、外国人留学生がチューターの実家に泊まるなど、特に交流を深めた学生たちがいたことは、このチューター制度が、外国人留学生たちの異国での人間関係を豊かにするために貢献したことを示していると考える。こうした関係は、第 1 章で述べたように、チューターという存在が友情をもたらしたという成功例の典型であろう。日本人チューター学生たちが実施した業務の分類からも、チューターは外国人留学生たちにとって、勉学の助けというよりも普段の生活を助ける存在となっていることが示されている。さらに、第 1 章ではチューター制度が、日本人学生の学びにも繋がるとする先行研究を報告した。本稿に報告するアンケート結果においても、留学生の母国についての異文化学習、自身の言語（日本語）に関する気づきや

他言語を学ぶ意欲の促進、日本語を教えることに対する喜びが報告され、これらが本学の日本人学生がチューター業務から得られた学びであると考えられる。

一方、多くの日本人チューター学生が挙げた業務上の困難として、担当する外国人留学生と会う日時や場所の決定に手間取ったということが挙げられる。多くの日本人チューター学生と担当外国人留学生は LINE でやり取りをしているが、会う日時や場所を決めるためにテキストでやり取りをしていると、実際に会って話すのに比べ、誤解が生じ易いという可能性がある。または LINE の返信が遅い留学生がいたため日時や場所の取り決めに手間取ったという可能性もあるが、定かではない。

さらに注目すべきは、「会う約束をしていた日に留学生が体調が悪いと言っていたので会うのを辞めたが、学校でその留学生が友達と楽しそうに歩いているのを見てしまった」という報告があったことで、これは当該の外国人留学生が日本人チューター学生と会うのを疎ましく思っていた可能性を示唆するものである。人間どうしの相性があるので、これが一概に悪いとも言えないが、チューターとの交流を喜ばしく思わない留学生は他にもいる可能性がある。今後外国人留学生を対象に、チューターの存在をどう思っているか調査した方が良いかもしれない。

また、質問 9「担当した留学生と自分の仲はどうでしたか」について、「仲良くならなかった」あるいは「どちらとも言えない」と回答した二人の日本人チューター学生は、ともに異性の外国人留学生とマッチングされた学生であった。今後日本人チューター学生と外国人留学生をマッチングする際は、同性の学生を選択した方が、お互いの仲にとってリスクが低いという可能性がある。ただし筆者の場合、日本人学生たちにチューターになるよう呼び掛ける段階で、各日本人学生が希望する担当留学生の母国、性別、日本語能力などを聴取した上でそれらの条件に合う外国人留学生をマッチングしている。この呼びかけの時点で、担当留学生の性別は気にしないが母国や日本語能力に希望条件がある日本人学生に対し、それらの希望条件に合わなくても同じ性別の留学生をマッチングするべきであろうか。性別をどの程度考慮すべきかは、本稿に報告する調査だけでは判断するに足らないと思われるため、継続した調査が必要と考える。

5．結論

本稿は、2024 年度後期に、筆者が担当する国際交流センター所属留学生のチューターを務めた日本人学生を対象に、彼、彼女らの業務報告書とアンケートの回答を基にした調査結果を報告したものである。本報告は、チューター制度が外国人留学生と日本人チューター学生の双方に様々な利益をもたらすことを示す一方、課題も見られた。こうした課題は、外

国人留学生を担当する教員の間で共有され、今後の参考となることが望ましいと考える。また、本稿は日本人チューター学生を対象として調査を行ったが、考察に述べたように、外国人留学生の思いも調査する必要がありそうである。日本人チューター学生と外国人留学生の双方の意識にすれ違いがあるかどうかを調査することで、日本人チューター学生と外国人留学生のマッチング及びチューター業務期間中の助言等のために役立つ情報が得られる可能性がある。

謝辞

2024 年度後期、チューターとして渡日間もない外国人留学生の生活を支えてくださった日本人学生の皆さんに、心より感謝申し上げます。また、チューター制度を管理してくださり、個々のチューター学生と外国人留学生に対応してくださった国際交流センターの赤塚様にも、厚く御礼申し上げます。

参考文献

宇塚万里子・岡益巳（2016）「ボランティアによるチュータリングの現状と課題　－留学生に対するアンケート調査結果を踏まえて－」『岡山大学全学教育・学生支援機構教育研究紀要』1，2016.

宇塚万里子・廣田陽子・岡益巳・深田博己（2019）「留学生ボランティア・WAWA によるチュータリングの現状と課題　－チューターに対するアンケート調査結果を踏まえて－」『岡山大学経済学会雑誌』49，17-34.

岡部真理子（2018）「留学生を支援する日本人チューターの学び　－ PAC 分析を用いたアジア圏チューターの事例から」『都留文科大学研究紀要』87，297-315.

大塚薫（2016）「外国人留学生に対する支援体制の構築　－チューター制度に関するアンケート調査結果からの検証－」『高知大学留学生教育』10，45-61.

副田恵理子（2010）「チューター活動における日本人学生の学び　－日本人チューターと留学生のインターアクションの分析から－」『藤女子大学紀要』47，87-102.

園田智子（2008）「チューター活動における日本人学生と留学生の異文化間理解　－チューター活動実施後アンケートの自由記述分析から－」『群馬大学留学生センター論集』8，1-12.

田中里奈・椎名渉子（2019）「留学生を対象としたチューター制度の現状と課題　－フェリス女学院大学を例として－」『フェリス女学院大学文学部紀要』54，61-78.

濱田龍之介・根本直弥・山﨑瑞紀（2012）「留学生と日本人学生のためのチューター制度の試験的導入とその効果」『情報メディアジャーナル』13，117-121.

三重大学国際交流センター（2024）「2024 年度後期　新渡日留学生チューターについて」https://moodle.mie-u.ac.jp/moodle35/course/view.php?id=20743

三重大学国際交流センター紀要［投稿規定］

2014 年 3 月 13 日改定
2023 年 3 月 2 日改定
2024 年 6 月 1 日改定
グローバル化推進会議

1.（名称及び目的）

本紀要の名称は『三重大学国際交流センター紀要』とし、主として三重大学や三重県内の地域社会において実施する国際教育、国際研究、国際交流、語学教育に関わる内容の、研究論文、研究ノート、実践報告を発表する場を提供することを目的とする。

2.（編集委員会）

三重大学国際交流センター内に、三重大学国際交流センター紀要編集委員会（以下、編集委員会）を置く。編集委員会は、三重大学国際交流センター長と、三重大学国際交流センター専任教員 1 名（任期 1 年）によって構成され、編集委員長は三重大学国際交流センター長とする。編集委員会が国際交流センター紀要の出版に際し、すべての責任を負う。

3.（投稿資格）

本紀要への投稿資格は、三重大学に勤務する専任教員あるいは非常勤教員であることを原則とする。但し、編集委員会が特に認めた場合はこの限りではない。

4.（原稿規定枚数）

原稿の枚数は、研究論文、実践報告については、11 枚以上 15 枚以内（1 枚＝ 40 字×36 行）、研究ノートについては 5 枚以上 7 枚以内とする。図表等もすべて規定枚数内に含める。

5.（使用言語）

本紀要に掲載する研究論文、研究ノート、実践報告は、日本語または英語で執筆したものとする。執筆の詳細は「執筆要領」に別途定める。

6.（原稿論文等の採否）

投稿された原稿については、編集委員会にて以下の審査を行った上で採否（条件付き

採択を含む）を決定し、投稿者に通知する。

（1）投稿原稿の内容が、本紀要の発刊趣旨、対象領域に合致していること。

（2）投稿原稿の構成、文体が紀要にふさわしく、投稿規定に則っていること。

（3）未発表であること、論文作成にかかる不正がないことが誓約されていること。尚、原稿の種別にかかわらず、当該学術領域の専門家による内容評価は行わない。

7.（投稿の受付）

編集委員会は投稿申込みおよび原稿提出の締切を定める。締切日までに提出され、採用された原稿は、原則として当該年度の号に掲載する。

8.（論文等の公開）

掲載された研究論文等は、原則として電子化し、インターネット上でも公開する。

本規定は 2024 年 6 月 1 日より運用を開始する。

三重大学国際交流センター紀要［執筆要領］

2011 年 6 月 15 日改定
2024 年 6 月 1 日改定
グローバル化推進会議紀要編集委員会

1. 原稿は、A4 用紙を使用し、マイクロソフト・ワードで作成する。
   ［和文の場合］ 1 頁：一行 40 字× 36 行
   ［英文の場合］ 1 頁：36 行（行数のみ指定・ 1 行の文字数は指定しない）
   ［ページ余白］（和文・英文とも）上 35mm、下左右 30mm

2. 注は、[(1)] [(2)] [(3)] のように本文中に通し番号を付け、後注とする。

3. 引用・参考文献は、著者名又は論文執筆者名、（当該著書刊行年又は論文発表年）、書名または論文名、出版社又は当該論文発表誌名、巻数及び頁数を記す。
   【例】山田祐二（1995）『日本論』河人社
   山本幸夫（1996）「日本の民間習俗」『〇〇大学紀要』vol. 21、pp. 30－42.
   Psathas, G.（1986）The organization of directions in interaction, *Word*, 37（2）, pp. 54－66.
   Riggs, Fred W.（1966）*Thailand: The Modernization of a Bureaucratic Polity.* Honolulu, HI: East-West Center Press.

4. 原稿は、次の順序で執筆する。
   ［和文の場合］
   ①論文名と執筆者名（日本語）
   ②論文名と執筆者名（英語又はその他の言語）
   ③要旨（英語又はその他の言語で 200 語以内）
   ④キーワード（日本語で 5 語以内）
   ⑤本文
   ⑥後注
   ⑦引用・参考文献

［英文の場合］

①論文名と執筆者名（英語）

②要旨（日本語で 400 字以内）

③キーワード（英語で 5 語以内）

④本文

⑤後注

⑥引用・参考文献

5. 筆頭執筆者は、原稿を word ファイルおよび PDF ファイルで期限までに E メールで kokusai@ab.mie-u.ac.jp まで提出する。メールの件名は［国際交流センター紀要原稿（執筆者名）］とする。

6. 校正は、執筆者本人が再校まで行う。校正段階での内容の変更は認めない。変更部分が多い場合、別料金が発生する場合がある。

執　筆　者　一　覧

三重大学国際交流センター

正　路　真　一　　助　教

百　瀬　みのり　　非常勤講師

三重大学教育学部

富　田　昌　平　　教　授

周　　世　超　　特任講師

四日市市立下野保育園

西　谷　優里彩　　保育士

編　集　後　記

『三重大学国際交流センター紀要』第 20 号（留学生センター紀要より通巻第 26 号）をお届けします。今回は、研究論文 4 本の掲載となりました。これらの研究は、日本語の格助詞や、日本語に対応する中国語表現などの言語学的研究、また三重大学の外国人留学生チューターを対象とした報告、さらに超自然的存在についての幼児の認識についての研究など、幅広い内容となっています。

三重大学国際交流センターは、来年度より三重大学国際戦略機構となり、新たな出発を迎えます。国際交流センターとしては最後の紀要となりますが、今後も皆様の様々な研究や取り組みをお伝えしていきたいと考えています。本紀要が、国際やその他の教育に携わる方々にとっての一助となれば幸いです。引き続き、どうぞよろしくお願い致します。

（正路　真一）

三重大学国際交流センター紀要第 20 号（通巻第 27 号）

2025 年 3 月 31 日　印刷
2025 年 3 月 31 日　発行

編集委員：正　路　真　一（国際交流センター）

発行者　三重大学国際交流センター
〒514-8507　三重県津市栗真町屋町 1577

印刷所　伊藤印刷株式会社
〒514-0027　三重県津市大門 32-13
TEL 059（226）2545　FAX 059（223）2862

BULLETIN

OF

CENTER FOR INTERNATIONAL EDUCATION AND RESEARCH

MIE UNIVERSITY

Vol. 20

Contents

Articles

Differences in e-mails used to express gratitude

Comparing Japanese Native Speakers and Chinese Native speakers

..... MOMOSE Minori (1 – 16)

Do young Japanese children immediately think of God as a supernatural being?

..... TOMITA Shohei and NISHITANI Yuria (17 – 31)

The Corresponding Chinese Expression for the Japanese Word "*Sasuga*"

..... ZHOU Shichao (33 – 47)

Research with Japanese Student Tutors from Fall 2024

..... SHOJI Shinichi (49 – 63)

Information on Subscription of the Bulletin ..... (65)

Instruction to Contribution ..... (67)

Authors ..... (69)

Postscript by the Editor

CENTER FOR INTERNATIONAL EDUCATION AND RESEARCH

MIE UNIVERSITY

2 0 2 5